ドイツの被征服者に對する態度に就て

一　プロシヤ人とドイツ人

今次の大戰に當つて、各國の高名な學者中には實に悲慘なものがある。敵愾心を挾んで、徒に曲辯を弄する結果、學者として取るべき冷靜な態度を缺いてゐる者が甚だ多いのである。是れでは凡人と何等異る處はない。學者としての權威が何處に求められやうぞ。我々日本人は事實に於いて聯合軍側に加擔してゐる者ではあるが、兵亂の巷が眼前咫尺の間に展開されずして、遙かに離れてゐるので、直接實戰の狀態を見聞せざるが故に、吾々の感情はこれに依つて振蕩されるやうな事が少ない。從つて比較的冷靜な判斷を下し得

る地位にある。

此講演を爲すに先ち、或友人が『ドイツの惡口かね』と笑ひながら云つた。然し私自身は全く公平な態度を取つて居る積である。私は二十四歳より三十一歳まで、卽ち最も樂しき靑春時期をドイツに過したのであるから、寧ろ多大の同情をドイツに對して持つて居るのである。而して此長き留學中余は老人とも靑年とも、貴族とも社會黨とも交際し、出來得可く多方面の觀察を得んことを努力した。夫れで私の考では、ドイツの事情を了解せんと欲せば、第一にプロシヤ人と一般のドイツ人の區別を知る事が肝要であると思ふ。偉大なる政事家、學者、詩人、音樂家と云ふものは、多くはプロシヤより出でずして、プロシヤ以外のドイツ各地の出身である。尤もビスマルクはプロシヤより出てゐるが、是は寧ろ例外である。

元來プロシヤの人民の多數は無氣力であつて、何でも彼でも政府に盲從し

て、自主自立の精神が乏しいのである。蓋し歴史上プロシャは小邦から次第に領土を増して興つて來たのであるが、而も其領土が初めは諸々方々に散ばつて居て、其間に聯絡が無かつた。此散ばつて居る諸地方を聯結統一して、初めて眞の强國と爲したのは、全くプロシャ代々英勵な君主が出でて、行つた仕事であつて、各地の人民は寧ろ愛鄕心の方が盛んであつたが、無氣力であつて君主の力に引づられて、否々ながら盲從して來たのである。去れば、プロシャの成功は第一に君主政府の力で、人民は爲めに富强となつたのであるから、自然之を崇拜し、從つて歴史的『御上任せ』の盲從の習慣を作つた。夫れでプロシャの君主、政府は從來他國に對して隨分酷い事を爲て居る。已れさへ好ければ、相手の感情を害したり、苦痛を與へることは一向構はぬ。唯力で無理押しに押通して來たのが、プロシャの歴史である。フレデリック大王も殘忍な事をした。ビスマルクも隨分酷薄な事をした。プロシャ人と云へ

ば、ドイツ人の中でも嫌はれたものである。けれど幸にもそれが成功して、今日に及んでゐるのである。一體プロシャ人にはスラヴの血が大に雜つて居て、其國民性は倨傲尊大、自ら高く持し、他邦人を了解する能はず、妄に之を輕蔑し排斥し、腕力崇拜の傾が强く、凡ての事を力で解決する、腕力以外何物もない、腕力が最後の解決手段であるといふ樣な信念を持つて居る。

プロシャ以外のドイツ人、特に南ドイツ人の氣風は、前述のプロシャ人の氣質とは非常に異なつて居る。彼等は理想に耽り、勤勉にして學を好み、遲鈍にして悠長に、同情に富んで居て愛鄕心が强かつた。去れば此性質の相違を見て、今より百年前には、ドイツは必ず南北二國に別れるであらうとの說が專ら行れたのである。

しかもプロシャの力の崇拜と、少からず他のドイツ人の力に依つて成立つたプロシャの組織の完全と、ドイツが他國に蹂躙されて統一の缺乏を慨せる

と、此等の諸原因が集つて、終にプロシャをしてドイツの覇者たらしめ終に統一のドイツ帝國を成立せしめた。

此統一はドイツ一般の爲めに幸であつて之に依りてドイツは世界的に發展を得たのであつて、其功勞は確にプロシャに有るのであるが、しかも惜しむ可し之が爲めドイツの氣風が次第にプロシャ化した結果、倨傲自惚に走り自重と眞の偉大なる組織的發展を計らずして、他國民の眞價を了解せず、其利害を輕蔑し、露骨輕躁功を急ぎ腕力を以つて萬事を決せんとするに至つたのである。ドイツが外國に對して、此氣風を多く示したのであるが、此中心となつたのはプロシャであつて、而して其成績は甚だ面白くないのである。殊に被征服者に對する態度に於ては、それが一層甚しいのである。

二　獨政府二州同化策の失敗

エルザス・ロートリンゲンは、一八七一年の普佛戰爭の結果、フランスより奪取したのであるが、此地方は元はと云へばドイツ領である。且つ人種から云つても、血系上州民はドイツ系に屬するものである。ドイツはこれを感化してドイツ化せんと試みた。果してドイツは成功したらうか、一八一七年より一九一六年に至る迄四十五年の跡を見るに、エルザス・ロートリンゲンの州民は、毫もドイツ化してゐない。これを州民統治の狀態に見るに、エルザス・ロートリンゲンはドイツ帝國協同の領土とし、プロシャから代官を派し、プロシャの勤勉にして傲慢、形式のみに拘泥する行政官吏より成る官房政治と、人民の一擧一動にも干涉する警察を置き、統治の任に膺らしめた。而して州民をドイツ化せんとするよりは、寧ろプロシャ化すべく、あらゆる壓制と專擅と干涉とを加へたのである。州民の反抗は期せずして起つた。

州民は此の如き支配に屈すべきに非ずとして、自主權を要求した。獨立の

聯邦としてドイツ聯邦會議に州民の代表者を出して帝國の最高立法行政に參與せしむべく運動した。官憲の干渉に堪へずして、多數の州民がフランスに逃るゝや、プロシヤ政府は彼等の拋棄して行つた土地を沒收して、これをプロシヤ其他の移住民に與へ、こゝにドイツ主義を植ゑつけやうとした。ところが現今プロシヤ政府に反抗する主なる者は、却つて此の移住民の子孫に少からずある程、干渉が嚴しかつたのである。此うして官民の衝突は長い間續いたが、一八八七年帝國議會の選擧に際し、エルザス・ロートリンゲンから選擧された代議士は盛んに自州の利益を鼓吹した。然し其後政府の干渉の手が稍緩んだので、反抗も一時少しく下火になつた。然るに一九〇九年の頃から再び州民に對する干渉が猛烈になつた。干渉しなくても濟む程の些細の出來事に至るまで、一々干渉した。その結果、翌一九一〇年には、官民衝突の種々の事件が突發した。

ロバルトツアウ市の體操大會が開催されて、各體操大會から代表者を出し、競技に加はらしめた。一八七一年の時佛領に殘されたベルフォール市、ジロマニー市からも、舊同州の好みから代表者を派遣した。然るに警察官は之に干渉した、兩市體操會員の行列に參すること、及び旗を立てることを禁じた。會頭の之を肯んぜざるや、捉へて監禁した。又ノアスヴィル及びウイッセンブルグに於ては佛時代からの老兵が、戰友の第四十年追弔祭をする譯になつた處、官憲は是叛逆的行爲であると稱して、直に中止を命じた。ミュールハウゼンに於ては、或一年志願兵が其の友人と佛語を語つた所以を以つて、當然進級すべき進級が行はれなかつた。タンに於ては僅に十二歳の中學生——而もドイツより移住した人民の子が、マルセーエーズの佛國國歌を謠つた廉に依り、獄に投ぜられた。州民の敵愾心は事件の發生毎に煽られて、反抗の氣は日一日と昂まつた。

一八八〇年七月廿五日には、ストラスブルグ大學の某教授が講義中に於て、『プロシヤ人はエルザス人よりも佛語がよく出來る』と嘲つたのが端なく學生を怒らしめ、彼等は舌打を以つて之に應じた。斯る教授に對する侮辱は同大學創立以來の珍事であつた。又た一九一〇年一月八日メッツの音樂會に於いて、フランスの曲を佛語で謠つた爲に、官憲の干渉をうけた。其の會合は政治的意味の會合でもなく、又た公開の會合でもなかつたに拘らず、警官は會場に闖入して解散を命じた。會頭が直に之を承諾しなかつたので、會頭と樂長とを拘引しようとして、會衆警官との間に格闘が始つた。茲に於て會員及び列席者はナポレオン一世の勇將ネー將軍の像の前に集つて、高らかにマルセーエーズを謠つた。警官は多勢に無勢で、如何ともする能はず、直に軍隊の出動を要求し、銃劍の力に依つて、會衆を解散せしめた。

更に一九一三年には有名なツァーベルン事件が起つた。一九一〇年以來、

國防上の關係で、急に兵營が兩洲内の至る處に設けられた。ドイツでは兵營が設けられると、其の附近一帶に風儀が紊れて來ると云はれて居る。それがエルザスに於ては、軍隊の士卒が公衆に對して實に亂暴狼藉を極めたのである。ツァーベルン兵營の一卒が路に衝突した一人の市民を劍で刺した。その罰として兵卒が二ケ月の禁錮を命ぜられたのは當然な事であつた。然るに少尉フォン・フォルストネルが豪語して、『何んだ、一賤奴の爲に二ケ月の禁錮か、俺なら賞與として二十マルクやるがな』と云つた。これを傳へ聞いた市民は、激怒其の極に達し、フォルストネル少尉の邸宅に石を投げつけるやら、兵卒が外出すると、ワイ〳〵騒いで嘲罵するやら、兵士と市民との衝突は毎日のやうに起つた。終にフォルストネル少尉は、拔劍して跛の一靴工を斬つた。果然、事件は擴大されて、非常な騒ぎになつたので、政府でも打捨て〻置けないから、少尉を輕罰に處して、兵營を他所に移した。之に對して、皇太子

殿下からツァーベルンの軍隊に同情した電報を送つたので、カイゼルは其の輕擧を戒めた。併しフォルストネルの罰せられ方が、如何にも手緩いものであつたのは事實である。

三　政府懷柔策の失敗、失敗の原因

こんな有樣で、ドイツの被征服者に對する態度は全然失敗に終つてゐる。彼等は腕力のみを見て、人心の機微を察すると云ふ事がない。今度の戰爭にしてもさうである。ドイツ側では英人や佛人を了解してゐない、一部を見て全部を察せず、却つてこれを侮り、失敗を招いた跡が見える。一國民を判斷するに一面を見ただけで、さう論理的に分るものでない。迂餘曲折のある裏を見ないで、表面だけ見て判斷を下して了ふから、意外な誤を生ずるのであ

る。今日、世人はドイツ人を賞讃して、何でもする事が論理に適つてゐる、組織立てゝ仕事をするから、從つて成功が著しいものがあると云ふ、論理に適つてゐる故に、必ずしも常に眞にして正と云ふ事はない、然し一般には論理的に示された方が人の頭に入り易いので、直ちにドイツ崇拜になつて了ふが、歷史的研究をせざる限り、是れは無理からぬ次第である。ドイツ人の英國を觀察し、佛國を觀察するにしても、ロンドンやパリーの表面に現はれて居る所のみを見て、論理的に推斷して了ふから、飛んでもない誤に陷るのである。プロシヤが、エルザス・ロートリンゲンを統治するに至つても、州民の心情を察せずして、ドイツ否プロシヤ軍隊及ひ警察の力を以つて之を壓んとした爲に、エルザス人をプロシヤ化さんとして、却つて移住プロシヤ人がエルザス化された傾になつたのである、

ところが、近年に至つて、政府もこれでは不可ないと云ふ事に氣がついた

で、一九一〇年三月十四日の帝國議會に於て、大宰相ベートマン・ホルウェッヒはエルザス・ロートリンゲンに一の憲法を與ふるの意あることを發表した。而して間もなく內務大臣デルブュック氏がストラスブルグに來て、行政府の人々を始めとして、州民の代表者と懇談を交して、憲法の草案を作るのであると宣明した。然るに此目的を以つて代官は宴を催して、デルブリュクを主賓とし、州民の『代表者』を招待した。然るにウェッテルレ、ウェーベル、プライス、ブルーメンタールなど、平生最も州民の自治權を主張する有志者は一人も招待せずして、全くこれに關係のない代表者のみを招待した。

さてこそ、州民は其時既に政府の眞意の有る所を悟り得た。果して出來上つた憲法を見るに全くプロシャ主義のものである。上下兩院を置いて、上院には三十六名の議員、此の中十八名は大學、高等裁判所、商業會議所等の代表者を之に宛て、殘る十八名は勅選議員を以つて之に宛た。下院は六十名の議員

より成る譯であるが、被選擧者の資格が非常に高い、普通選擧ではあるが、年齡に依つて投票の差がある、三十五歲以上は二票、四十五歲以上は三票を投ずる事が出來る。普通選擧を許したのは、これが爲に社會黨とエルザス黨が相反目するであらうと豫期したのであるが、事實は全く反對で政府の目算はがらりと外れ、社會黨は選擧の際『佛國萬歲！プロシャを倒せ！』の叫聲を發した。

新議會は初より反抗的精神を遺憾なく示し、豫算に代官の俸給を半減し、カイゼルの兩州行幸歡迎費を全部否決した。之に於いてカイゼルは激怒し賜ひ、ストラスブルグ市御來着の際市長に向つて左の勅語を下された。

『聞け！　今日まで、卿等は僅に朕の寬洪なる方面のみを窺知するを得た。今後朕の他の方面を知るの機會あらん。現狀維持さるべきにあらず。現狀にして繼續せんか、朕は汝等の憲法を廢し、プロシャに併合すべし』

此勅語はエルザス・ロートリンゲンの人民のみならず、プロシヤ以外のドイツ一般に大なる物議を惹起し、聯邦會議帝國議會の權能を無視したものであるといふので、非常なる反抗熱を起し、帝國議會に於いて社會黨の一議員は『若し英國王が斯る事を口にするならば、彼はパルモラルに禁錮さるべし』と激語したので、大臣等は聯袂退席するといふ大騒動を起した。

更に驚くべきは、州民にして徵兵年齢に達した男子が、一朝獨佛間に戰起れば、自分等は佛に對して鋒を向けねばならぬ、これは堪へ難き所であるといふので、彼等はフランスに逃去つて、佛の海外軍隊に編入を求むるのである去れば一九〇〇年から一九一三年までに、斯して佛の在外軍隊に加つたエルザス人の數は、驚く勿れ無慮二萬二千人といふ多數に上つたのである。

唯に青年男子のみならず、妙齡の女子は中にも親佛排獨の氣風が盛んである。一九一三年ドイツ皇后陛下がエルザスに行啓あつた際、メッツ附近の模

範的女學校に臨御あつて、親しく生徒の授業を參觀せられた後、生徒等に向つて、『御身等の欲と思ふものを何なりと遠慮無く告げよ、叶へて得させん』と宣うた。皇后の心中には、無邪氣な少女等は菓子とかリボンとかが欲しいと云ふことゝ豫期せられた。然るに彼等の答は斯うである『妾等に少しくフランス語を敎へさせ賜へ』と。夫帝の豪傑振が州民に與へつゝある惡感を、何分か融和せんと勤めつゝある柔しき皇后陛下も、少女等の此意外の答に驚き落膽致されたことであらうと思ふのである。

エルザス・ロートリンゲンの人民が、人種よりするも歷史よりするも、寧ろドイツに屬すべきものなるに、何故に斯くドイツと反抗して、フランスに對して愛着の念が深いかといふに、第一に、兩州がフランスの手に入つた頃はドイツは亂雜の有樣で、常に外國から蹂躪されたのに反し、兩州は佛領となりて安寧秩序を得、且つ大强國の一部として其國威發揚に匂霑することが久し

く續き、兩州の歴史が佛の歴史と全く合一することゝなつたのであつた。第二に、十七世以來殊に十八世紀の佛の啓蒙文學は歐洲一般を支配したが、此佛の文化の影響が兩州人民深く染込んで居つたから、又今のドイツ文化は美術的方面などでは遙かに佛國に及ばぬから、エルザス人の考へ方が容易にドイツ化せられぬ一原因となつた。

最後に第三の最有力なる原因は、フランス大革命は種々と慘禍を流したこともあるが、一方に歐洲社會に非常なる利益を與へて居る事が多々ある。一七九〇年の佛の最初の憲法に於ける地方行政革新は我廢藩置縣に相當し、此迄行政、司法、習慣等區々であつた諸地方の區分を全廢し、全國を八十三のデパルトマンに分つて、之に同一の立法行政司法を布き、茲に初めて統一と自治とを併せ與へ、從來の如く人民は政治に無關係の者にあらずして、地方自治權と共に、全國の政治にも參與することになつて、自己が佛國民の一部

で、佛國の利害を双肩に擔うて居るとの感念を深くした。此味を一度嘗めた者は容易に之を忘れられぬので、エルザス・ロートリンゲン人の心にも佛國民の一部であるといふ感が深く染込んだのである。

去れば、ドイツが此感をドイツに向つて轉ぜしめんと欲せば、之に自治權を與へ、他のドイツ國民と全く平等であるといふ感を持ち得る樣に仕向けなくてはならぬ。元來彼等は同じ人種、舊き歴史に於てドイツに屬すべきものであり、ドイツの文化も今は盛んになつて來て居る時であり、又國力も日に發展して世界に雄視するのであるから。遣方に依ては、彼等の感情を融和轉換せしむることは、必ずしも不可能ではなかつたであらう。然るにプロシヤ人は力の成功に醉ひ、何んでも高壓的に行へば成功すると考へた結果、プロシヤ流の官吏警官の傲慢、酷薄、干渉高壓を以つて人民の感情を必要以上に害することを躊躇せず、人民の熱望する自治を許さず、許してもプロシヤの一

部同様に扱はんとして、益々其反抗心を煽動するに至つたのである。

四　ポーランド人同化の失敗

元來ドイツに緣故あるエルザス・ロートリンゲンの人民すら同化し能はぬプロシヤが、如何にして他の非ドイツ人民を長く制禁し得んや。ポーランドの一部は同國の三回の分割に依りてプロシヤ領となつたが、此人民を眞のプロシヤ人に化し、其他を眞實のプロシヤ領と爲すことには今日まで成功して居らぬ。さすがのビスマルクも言語の檢束、教育の檢束、言論の檢束等に依りポーランド人を同化し能はざることを悟つて、今や多くのドイツ人を同地に移して自然にポーランド人を壓し、ドイツ的と爲ようと試みた。之が爲めに政府はポーランド人の土地を多く買收して、これをドイツ人に安く賣つた。

かくして漸次ドイツ人の村を多く作り、此地を全くドイツ化さうとした。

ポーランド人はビスマルクの壓迫に拘らず、其人種、習慣、言語を保存することに全力を注ぎ、國語にて新聞著書を發行し、之を禁ずれば祕密出版を行ひ、而してビスマルクの土地買收政策に對しては、プロシヤ政府が高價でポーランド人の土地を買收して、之を極めて廉價で移住獨人に賣拂ふ、其跡に廻つて、政府の賣下代價より少しく高く拂つて之を買戻した。夫れがあるからポーランド人も移住人も利を得て、損をするのは中間に立つた政府のみで、ポーランドをドイツ化する目的は依然行はれなかつた。

プロシヤは隨分酷薄な方法をドイツにも用ゐて、これを統一することを得た。而して統一されたプロシヤ以外の諸邦も、統一により發展するドイツ國運の利益を被り、從つて次第にプロシヤの此功を認め、且つ力を遠慮なく用ゐたプロシヤの方法を崇拜する樣になり、卽ちドイツ一般が次第にプロシヤ

化されて、外國に對しての行動に、露骨なるプロシヤ流の遣方を發揮するに至つた。目下の戰爭初つて以來、ベルギー、セルビヤ等に對する態度は、皆力を以つて最上の方法とする思想の論理的結果である。勝てば官軍負れば賊よで、勝さへすれば何を爲ようと構はぬといふ、極めて淺薄な考に基いた遣方である。

ドイツの植民政策を見ても、組織立てゝ仕事をするドイツ人は逸早く占領の紀念碑を作り、系統的の鐵道を作り、港灣を修築する等の手際が誠に鮮かであるが、土民に臨むと之を動物扱にして、人心收攬に力を致さぬ結果、ドイツの植民地に數々土人の謀反が起り、莫大の人命と入費を要することが少からぬのである。

去れば英人はトランスヴァールの併合後、ブールの反抗に苦み、反徒と妥協して、これに賠償金を與へ、之に自治權を與へた。之は一見反徒に降參したもので、威信に關する樣には見えるが、其結果ブール人は、今度の戰亂起るや、ドイツの期待に違ふて其味方とならず、反つて以前にイギリスに極力反對した、ボータやデウェットが英國に忠誠なるのみならず、ブール人を率ゐて、ドイツの植民地を攻めたではないか。之れ畢竟ブール人が今や英國と事を共にするが其の利益であると信ずるからである。又サー・ジョンストン氏の如き官邊に信用あり勢力あるアフリカ通の人々の間に『我々の植民地經營は土民等を敎育して、行く〳〵は彼等に充分の參政權を與へる覺悟を以てせねばならぬ』と云つて居る。之は長き經驗により、英人が被征伏民を同化融和する眞の方法を漸く了解し初めたと見て宜しいのである。我輩は必ずしも英の崇拜者ではないが、此點は大に學ぶ可き處である。又彼のエジプト、及びマレー半島の諸保護國に對しても、英國が名を棄て實を求める巧妙なる所が窺ひ得るのである。

翻つて日本を見るに、我國運は今や浸々として發展しつゝある、我が人口は日に增殖しつゝある、我が富は次第に蓄積しつゝある。從つて海外に雄飛することは、今後絶對必要と云はなければならぬ。然し乍ら此際吾人が妄りに地を奪ひ民を征するを以つて念とするは、決して策の得たるものではないのである。勿論各地にありて開發されざる遺利を收得するは、人類の爲にも利益であるから、之に力を致すは正當なる所業であるが、此際吾人は成る可く土人にも利益を分ち、其勞力等を正しく利用し、斯くて彼等と吾人と利益上密接離るべからざる關係を生ぜしめ、彼等をして吾人と事を共にするの利益必要を覺らしめざる可からず。

同時に、吾人は彼等を敎育指導するに、兄弟の如き温情を以てせざる可からず。日本は世界に卓越したる國體を有する。吾人は世界の人類を征伏せずして、之を感化救濟するの大精神なかるべからず。然るに我同胞の内に此覺悟

なく、プロシャの腕力崇拜の一派があつて、徒らに征伏を夢み且つ、文明の我に及ばざる人民に對し輕蔑酷薄の心を抱き、之を愛憐して救濟敎導せんとの念なき者亦少しとせぬ。此等は皆急早の國運發展に心醉せる成上り根性の結果といふ可きである。斯の如きは覇道にして王道ではない。王道は迂遠の如くして然らず　十年二十年の事を念とせず、國家百年の大計を立てざれば、今日の隆盛の衰亡となるの危險あるを思はねばならぬのである。

（大正五年十一月講演）

露獨國是の絶對的衝突

一　國際的死十字

醫學上にトラウベ氏の死十字(Moritz Traube's Totenkreuz)と云ふ語あり。病者の熱型表に於て、脈搏の沈低を表現する曲線と、體溫の昂騰を表現する曲線とが相交叉する時は、其患者既に危篤に迫りたるものにして、此の交叉點を死の十字點といふなり。

歴史上國際間にも、これに類したる事を見ることあり。卽ち甲國と乙國との發展膨脹の方向を表現する線が、相交叉する場合にして、斯る場合には、兩國間に絶對に調和し能はざる利害の衝突を起し、武力に依りて之を解決す

るの外に道なきを以つて、茲に雙方存亡興廢を賭して、最後まで戰はざるを得ざるなり。此際假令兩國の間に調停和睦成ることありとも、これ畢竟一時を糊塗するに過ぎずして、必ずや最後の解決に到達せざれば止まざるなり。而して此最後の解決に到達したる時、一方は隆々たる勢を得るに反し、他方は國運衰へ、甚しきに至りては、亡滅に瀕すること往々にして之あるなり。

二　北米及びアフリカに於ける英佛過去國是の死十字

靑史を繙かば斯る例決して少しとせず。太古ペルシヤとギリシヤと、ローマとカルタゴとの關係の如き之なり。近代に於ける其の著しき例を擧ぐれば第十八世記に北アメリカ大陸に於ける英佛の爭は、最も鮮明に此關係を表はせり。當時北米大陸東海岸の中央部にはイギリスの植民地ありて、次第に西方

の内地に進まんとす。然るにフランスは同時に北方のカナダ及び南方のミシシッピー河口よりルイジャナ州を占めて、南北を連絡せんとす。茲に於てイギリスの米大陸横斷方針とフランスの南北縱貫策とは、所謂死十字を形成し其結果英佛は長期の猛烈なる戰爭を行へり。第十八世紀のヨーロッパに於ける主要なる諸戰役は、一見歐洲大陸の事件の如くなれども、實は此の英、佛の世界政策衝突の局部的現象と見て可なり。卽ち英佛植民政策の衝突は、此等歐洲戰役に特殊の方向と色彩とを與へたるなり。オーストリヤ相續戰爭の末に英佛共に疲れて、一旦和議調ひたれども、根本問題解決せられざりしを以て、之は一時的休戰に過ぎざりき。次いで七年戰役に於いて英相老ピットは巧にプロシヤを操縱して、フランスを大陸戰爭に沒頭せしめ、其海軍力を利用して、遂にフランスの植民地を奪ひ、此の爭に根本的解決を與へたり。而して爾來英國は世界政策の角逐場裡に於いて、久しき間首位を占めたり。

又第十九世紀に於けるかのファショダ事件はフランスが西アフリカの自國領土をアフリカ東海岸アビシニヤに連絡せんとする大陸横斷運動と、イギリスがケープ植民地竝にエジプトを鐵道によりて繫がんとする南北從貫企劃とが相互交叉して生じたる死十字に外ならざるなり。此際フランスは政府軟弱にして、且つロシヤの後援を得る望無かりし爲め、遂に讓歩し、イギリスは戰はずして勝を收めたり。爾來フランスは深くイギリスを恨みたれども、イギリスはドイツを恐るゝ結果フランスを永く敵とするを不利とし、之をしてエジプトに意を斷たしむる代りに、モロッコに其勢力を扶植することを承認翼贊したり。

三　現代に於ける英露英獨及び獨露間の死十字

七年戰役の結果、フランスは植民的世界政策に於いて、全くイギリスの下風に立たざる可からざるに至りたりと雖も、フランスは第十九世紀に於て、安南、アルジェリヤ、チュニス、マダガスカル、コンゴー等に得る所少からず、且つ又其地理的位置よりして生産貿易の發展盛んなりしかば、國として甚しく衰弱するに至らざりき。又ファショダ事件に於いては、佛のアフリカ大陸横斷策は、水泡に歸したりと雖も、其後英國と調和の結果、アフリカに於てサハラを包む大領土を得、將來に於いて大に發展する希望も生じたり。されば二回の死十字事件に敗者たりしに拘らず、佛は幸に國運極度の衰微に至らざりき。

之に反し現代に於ける英露、英獨、露獨の關係は更に根柢的にして、其結果の双方の爲めに戰慄すべきものあり。

ナポレオン一世曰く『地理は永久歴史を形くる最も有力なる分子なり』と。

これ寔に古今の眞理なり。世界政策發展の上より云へば、現時の列强中、英國日本、北米合衆國の如きは、比較的有利なる地勢を占めたり。ロシヤは不凍港を有せざるが爲めに、其南下は國民の發展上止まんとして止み難き必要なり。然るに南方に豐富なるインドを領し、之を聯絡する幾多の領土を有する英國は、此のロシヤの南下策と正反對の利害を有するなり。されば第十九世紀に於いて、英國が或はトルコの保全を擔保し、アフガニスタンの獨立を顧慮し、支那を援助し、日本と同盟せる如き、皆之れ英露國是の死十字の結果ならずんばあらず。目下ドイツを制せんが爲めに、英露手を握り協力獨に當ると雖も、若し一度獨に對する危惧の去ることあらんか、再び兩者の角逐を促すべく、畢竟此爭は一方の國力衰萎して復起つ能はざるに至るまで、永久殘存して最後の解決を待たざるべからず。

ドイツは列强中最後に世界政策に著手せしものなるが、其地理的位置は、歐

洲に於いては、所謂『內側の利益』を有すと雖も、世界政策發展の上には、其地の利を得ざること、決してロシヤに讓らず。何となれば、ドイツはバルト海及び北海に於いて不凍港を有すと雖も、バルト海は其の口狹隘にして、北海の海岸は優勢なる海軍を有する敵國の爲めに封鎖され易きを以つて、一旦戰爭となるや、其植民地忽ち孤立して敵手に落つべきなり。これ現大戰の證明する所なり。故にドイツが海に出づるの必要は、ロシヤに讓る所なし、而してそは地中海に出づるにあり、更にペルシヤ灣及びインド洋に出づるにあり。之れ獨英の間に調停し能はざる國是の死十字ある所以なり。而して獨のアジヤ・トルコを勢力範圍に入れんとする必要が、コンスタンチノープル及びダーダネル海峽に於いて戰略上及び經濟上露獨の間に、更に痛切なる死十字點實現せざるを得ざるなり。

英は先に現大戰破裂前に於いて獨と協商し、アフリカに於ける獨領を整理

して之を該大陸の中央部に集めて、大陸を橫斷する一大團塊となして、獨の希望を滿足せしめ、同時に一方にタンガニーカ湖に依りて、自己の南北聯絡の目的を貫徹し、以つて此方面に起らんとする英獨間死十字の爭を、此湖の水によりて緩和せんと計りしのみならず、アジヤ・トルコの大部分をドイツの勢力範圍に入るゝことをすら許さんとせしことあり。（本書植民地整理に關する大戰前の英獨協商を見よ）此事若し無事に成功したりとするも、英獨間永く平和を保持したるや否や頗る疑無き能はず。然りと雖も英獨間の衝突は尙ほ一時的なりとも、多少の緩和の道を存することを知るに足れり。之に反して露獨間の死十字に至りては、今や單に理想問題に止らずして、實際的經濟的死活問題となり、兩國國民亦最近に之を自覺するに至れり。余は卽ち此點を少しく詳說せんとするなり。

四　アジヤ・トルコに對する獨の政治的軍略的慾望

前述の如く獨は其地理的位置よりして、世界發展上大なる不便を有す。獨人の多數の公言する所に據れば『英國は其優勢なる大海軍と植民地の完全なる聯結とによりて世界の海洋、殊にインド洋を我物の如くし、到る所に我等の發展を妨害す、而して我等は彼等に抵抗すべき海軍を有せざるを以つて、彼等をして我等の主張に聽從せしめんには、何處かに彼等の弱點を見出して之を脅すより外に手段なし』と。例せばパウル・ロールバッハ(Paul Rohrbach)氏は云へり。『吾人の主張を貫くことにイギリス人を屈從せしむるには、彼等の或弱點を押へざるべからず、而してエジプトは卽ち其弱點なり。イギリスはスエズ運河の爲めにエジプトを占領す、これ本國インド間の連絡點なればなり。ヨーロッパよりインドに至る道は悉く英領によりて支へられつゝあり。卽ち南アフリカ、英領東アフリカ、エジプト及びスーダン、南アラビヤ、南ペルシヤ、ペルシヤ灣、インド、オーストラリヤこれなり。而してイギリス

てイギリスの富の中心はインドに在り。故にスエズ運河はイギリスの死活問題を制するを以て、此のイギリスの弱點を押へざれば、イギリスを屈せしむると能はず』との意味を述ぶ。これ彼一人の論に非ず。メールマン(Mehrmann)、ケール(Köhl)、親獨主義のスウェーデンのキエルレン教授(Prof. Kjellen)等の唱ふる所にして、今やドイツ人の多數は之に賛同しつゝあり。

ドイツがエジプトを脅かさんとせば、先づバルカン及びアジヤ・トルコを手に入れざるべからざるや論なし。而して此際ドイツは同盟を名として、彼等の獨立保全を唱へつゝあれども、强國と弱國との同盟は自然に主從の關係を生ずるものなり。況んやドイツ人の國民性として、弱同盟國を壓服强制せんとするは、現狀に見ても之を察するに難からず。

トルコとドイツと同盟すべしとの論は、フレデリック大王の時既にあり き。但し王の考は遠交近攻の策以上に出でざりき。降つて一八四〇年に有名

なるフレデリック・リストは、北海よりペルシヤ灣に至る經濟的同盟の必要を說けり。同年コンスタンチノープル駐在大使館附武官たりしモルトケ亦戰略上より之を主張せり。然れども當時のドイツは未だ眞の統一を得ず、オーストリヤとプロシヤと相反抗する間は斯の如き事は夢想に過ぎざりしなり。

五　アジヤ・トルコの富源

ビスマルクはオーストリヤと戰つて、之をドイツより除外せしも、巧妙なる外交により之と密接なる同盟を作り、之を援助して露國に當るをドイツの利益と認めたるを以て、バルカン半島に於いてオーストリヤを後援せり。然れども彼はドイツ帝國の固定に心を專らにせし爲めに、植民政策、海外發展方針等には比較的に冷淡なりしかば、アジヤ・トルコの事には容喙せず、エジプ

トに英の勢力を得ることに反對せず、佛のチュニス占領の如き、反つて暗に之を援助せり。

然るに歷史家の泰斗レオポルド・フオン・ランケ(Leopold von Ranke)は早くも烱眼を東方に注ぎ『ドイツ國民經濟の將來はコンスタンチノープルの運命と密接の關係あり』と唱へたり。パウル・デーン(Paul Dehn)は一八八三年以來、スプレンガー(Sprenger)は一八八六年に、バビロニヤ地方を以つて『古代の最豐饒なる土地現代の最も有望なる植民地』と說破せり。一八九二年ケーレル(Kehler)は此地方を以つて『ドイツの植民に最も適したる地』と名けたり。實際研究の結果小アジヤは非常の富源を包藏することと知らるゝに至れり。即ちイギリスに對する世界政策發展の上にアジヤ・トルコを自由にするは軍略的のみならず、經濟上に最も重要なること次第に明白となれり。

アジヤ・トルコに於ける自然の富源は著しきも、未だ充分に開拓せられず。

第一には大なる石油田なり。卽ちモッスル(Mossul)の南東ケルクック(Kerkuk)附近よりエウフラテス河上のヒット(Hit)まで、昔のアッシリヤ及メソポタミヤ地方一帶に亙りて擴延する油田なり。これ等は目下未だ殆んど採取せられ居らざれども、凡ての徵候により其莫大なること疑無く、優に獨墺が從來アメリカ及びロシヤより供給を受けし所に代るに足るといふ。又キリキヤ及びアルメニヤ地方のタウルス山脈地方には、大なる銅鑛脈あり、其他の鑛物も亦少からず。

然れども中歐二國の爲めに更に重要なるは、此方面の發展に依りて、絶えざる衣食の原料の供給を期待し得ることなり。卽ちキリキヤ、南メソポタミヤ其他の地方は充分水利を發達せしむるに於いては、非常なる生產力を生ずべし。現にウェーデンフェルド(Kurt Wiedenfeld)が最近其著『ドイツ・トルコ經濟關係及び其發展』に於いて告ぐる所に據れば、トルコ政府はコニヤ地方に

於いて、五萬ヘクタール(一ヘクタールは略我一町二十五歩)の荒蕪地を排水及び灌漑によりて良耕地に變更するを得たり。又英人ウィルコック(Wilcock)以下專門家の說に據れば、シリヤ、アルメニヤ地方は其の開墾宜しきを得ば、充分に中歐の綿の需要を滿足せしめ、現今の如く專らアメリカの輸入に仰ぐの必要なからしむべし。又エウフラテス沿岸の不毛地及びアナトリヤの高原に於いて綿を多量に生產し得べしといふ。此他油樹各種の果實類煙草等も亦アジヤ・トルコより自由に得らるべし。

最後に中歐二國に對して最も重要なる事は、北及び南メソポタミヤより莫大なる小麥其他麵麭の原料を得るの望あることにて、此等地方は太古より穀物產出に有名なり、要は其灌漑の如何にあり。されば古代バビロニヤ、ペルシヤ時代より此地方を支配する國が隆盛なる時は、灌漑宜しきを得て、生產莫大なるも、之を怠れば忽ち荒廢して國力も亦衰ふるに至るなり。之に依り今や

獨人は此地方に投資して其地味を改善せば、中歐の食料は將來假令現今の如き封鎖行はるゝとも、尙豐富なる補給を受くることを得べしと主張せり。

以上の關係よりバルカン及びアジヤ・トルコが直接又は間接にドイツ人の手にあるは、ドイツの爲めに單に其政治的理想上必要なるのみならず、其經濟的發展上缺くべからざることなり。

六　ドイツの東進政策

前述の如くビスマルクが植民政策及び海外發展に比較的冷淡なりしは、ドイツ帝國の固定及び內國整頓に力を注ぎたる爲めなり　然れども內國整頓の結果經濟上の隆盛を致し、海外に對する膨脹發展熱の起るは自然の趨勢なり而して此趨勢を代表するは現帝ウィリヤム二世なり　世人は彼が好戰的君主

なる結果現戰爭を起すに至れりと稱すれども、余の見る所にては、カイゼルは寧ろ人民の傾向に引かれ行きしもの〻如し。デーン、スプレンゲル其他のドイツ人はビスマルク時代に於いて既にアジヤ・トルコに着目せり。

ウィリヤム二世がかの演劇的東方巡禮をなせし頃は、時人多く之を以てドイツ國內外のカトリックを籠絡せんと企てし爲めなりと稱したれども、そは主たる目的には非ざりき。此巡禮の途次一八九八年九月八日ダマスククスなる昔の十字軍時代の回教英主たりしサラヂンの墓に詣で『予は常に三億の回教徒の友なり』と叫びしにより、當時『ベルリン・カリフ』等の冷評を招きしも、之は宗教的意味よりは寧ろアジヤ人の心を收攬してアジヤ、トルコに勢力を得んと計りし爲なり。其結果としてドイツはトルコよりバグダッド鐵道敷設の許可を受けたるが、此のバグダッド鐵道設計の眞意に關して、當時ドイツは深く他に祕して語らざりしも、サー・ハリー・ジョンストン (Sir Harry

Johnston)は一九〇三年四月四日のロンドン財政雜誌に下の如く說けり

余もしドイツ人ならば、余は未來の夢に於いてドイツ、オーストリヤ、トルコを一團とせる大國を想見し、ハンブルグ及びコンスタンチノプルをバルト海アドリヤ海エーゲ海と結付け、其勢力を中部アジヤ及びメソポタミヤを經てバグダッド及び其彼方へ伸張せん。エルベ河口よりエウフラテスに連續せる帝國は、大國民が希望すべき最も立派なる目標なるべし。

而してエルベ・エウフラテス、ベルリン・バグダッドなる語は此時より大に人々の口にする所となれり。同年パウル・ロールバッハ氏は其著『世界國民中のドイツ』の初版を公にせり。其中にはジョンストン氏の如き言を政治上ならずして經濟上の意味に於いて述べたり。又前ドイツ大宰相ビュロー侯(Fürst von Bülow)は一九一三年『カイゼル・ウィルヘルム二世の下に於けるドイツ』中の祝賀文に於て其外交政略を辯護し極めて圓滑愼重なる語にて、トルコを

以て『吾人政治上の連鎖に於いて必要にして永く貴重なる一員』と名けたり。其理由としてはトルコの保全はドイツの經濟上、軍略上、及び政治上大なる利益なりと云ふに在り。又ヒンツェ(Hintze)は『ジョンストンの書けるは單なる夢想的の企』と嘲けれり。然れども此皆ドイツ人が三方四方に氣兼して、其鋒鋩を示さゞらんとするの言に過ぎずして、其裏面の眞意は知るに難からざるなり。

其後ドイツの意思は次第に明かとなり、ヂックス(Dix)著『ドイツの帝國主義』には此計畫はドイツの帝國主義に非ずして、同盟國の帝國主義なりと云ふ。而してパウル・ロールバッハは其監輯の下に續刊せられし『露禍』の第二冊アクセル・シュミット(Axel Schmidt)著『ロシヤ最終の目的』の序文に於いて、此點を最も露骨に率直に述べたり。此叢書の第一冊は『ロシヤの領土慾』の題にてクロパトキン將軍の建白書及び日露戰爭に關する覺書の二書を內容とし、

ロシヤの南下せんとする理想的及び實際的理由を擧げて、其のドイツ國是と絶對に兩立し難きを述ぶ。故に予は茲に其大體に論及する所あらんとす。

七　露國とコンスタンチノープル

抑〻海は歴史に非常なる關係を有す。國民發達の結果は他國民と交通の必要を生ず。而して茲に海が大なる關係を有するなり。殊に一國民が多少とも經濟上に發展するときは、他國民との貿易上陸と海とには大差あり。海は物資輸送に最も便利最も迅速且最も廉價なる道なり。從つて海に接せざる大國民が其發展上海に出でんとするは自然の勢なり。

ロシヤの昔はスラヴ人が統一なく秩序なき數多の種族に分れ、大河の口は皆他人種に占められたり。然るにスウェーデンのノルマン人來り之を征服し、

貿易の爲めに南下し當初は動もすれば鬪爭を惹起せり。彼等は東ローマのコンスタンチノープルを水路に依る遠征を以て屢〻威嚇せり。十三世紀に於いてロシヤは一旦蒙古の爲めに平定せられたるが、蒙古人に依つて始めてモスコー大公に封ぜられしイヴアン・カリタ(Ivan Kalita 一三二八年—一三四〇年)は、斯く表面蒙古人に屈服せしも、『自己政略の最後目的は自然の示したる限界を以て國境とするに在り』と云へり。是は卽ちウラル山嶺、カスピ海、コーカサス嶺、及び黑海なり。

其後イヴアン三世が東ローマ最後の皇帝コンスタンチン九世の姪ソフイヤと婚し、東ローマの文明を輸入すると共に、從來東ローマ皇帝に屬せし獨裁君主(Selbstherrscher)の稱號を稱用し、又東ローマの紋章たる雙頭鷲を襲用せり。茲に於いてコンスタンチノープルを都とするローマ皇帝の相續者たる大理想始めて起れり。爾後ロシヤ人の海に出でんとする運動盛んにして、南は

黒海、西はバルト海を目指すに至れり。イヴァン四世はバルト海に出でんとせしが、スウェーデンの爲めに其志を挫かれたり。此目的はペートル大帝によりて遂に達せられしも、彼にはコンスタンチノープルに對する大なる野心なかりき。

アンナ女帝の時元帥ミュニック(Münich)の獻策に據れば、『一七三六年にアゾヴを取り、一七三七年にクリムを取り、一七三八年にビアリゴロド(Bialigoro d)及びブヂャック(Budjak)(今のベッサラビヤ)を平定し、一七三九年コンスタンチノープルに國旗を樹つべし』と明言せり。卽ちコンスタンチノープル占領の實現を論ぜしは之に始まる。此頃ロシヤに對しトルコ保全の必要を感じて動したるはフランスなり。而して其ロシヤはオーストリヤの援助を得ざりしを爲め、一七三九年フランスの仲裁を容れ、ベルグラード條約を結ぶの止むを得ざるに至り、ミュニック將軍の壯圖は畫餅に歸せり。

ペートル大帝以後、第二のロシヤ帝國建設者と稱すべき女帝カザリン二世は、南方經略の大志を抱きしが、プロシヤのフレデリック大王は深く之を虞れ、『ロシヤがコンスタンチノープルを得ば、他日又ケーニグスベルヒに來ることあるべし』とて、自ら進んでポーランド分割を策し、ロシヤをして全ポーランドを併合することなく、而してコンスタンチノープルに手を伸ばすことを得ざらしめんとせり。

ナポレオン一世は、英に對してインドを脅す順序として、エジプトを攻め、爲めにトルコと敵對關係を生ぜしが、後トルコと結びて、專らロシヤを牽制せしむることに利用せり。既にしてトルコ分割を策し、其西北部を墺に啗はせ、東北部を露に與へ、而して佛はコンスタンチノープル以下南部一帶の地を取り、尙ほペルシヤと結びてロシヤと共にインドを攻むるの策を建て、之をロシヤに計りしにアレクサンドル一世帝は一時分割策に耳を傾けたるも、『ダー

ダネル海峡はロシヤ帝國の鍵なり斷じて之を外人の手に委すべからず』と云ひ、露の外相ネッセルローデも『ロシヤはコンスタンチノープル並にダーダネル海峡の入口を扼せるモシヤ半島、テネドス、インブロス各島を得ざるべからず』と主張し、斯くトルコ分割の未だ實行せられざる前に於いて、佛露共にコンスタンチノープルを得んと固執せしため、忽ちにして談判不調に終り、露は佛を疑ひ反つてトルコと和睦せり。

第十九世紀に入りて英國はロシヤの南下がインドを危くすることを思ひ、專らトルコ及びアフガニスタンの保全に全力を竭せり。ニコラス一世帝はトルコを分割するの計畫を立て、先づ之を佛國に咨りしに、佛國は之に應せざりしかば、ニコラスは更に英國と談判を開き、『若し英にして露のコンスタンチノープル占領、セルビヤの獨立、ブルガリヤ、ボスニヤの自治を承諾せばクレータ及びエジプトを英の爲すがまゝに任せん』と說きたれども、英は之

に耳を傾けざるのみならず、反つてフランス、サルヂニヤと結びて、トルコ援助を策し、玆に彼のクリミヤ戰役起りて、其結果ロシヤは一八五六年のパリー條約に依り、黑海に軍艦を浮べず、海岸に武器製造所を設けざることを誓ふの止むなきに至れり。

其後一八七〇年佛獨戰役に乘じて、露は黑海に關するパリー條約の規定破棄を宣言し、一八七一年のロンドン列國會議の議定書に、各國露の主張を認めて、唯ダーダネル海峡閉鎖の專權をトルコに與へたり。爾來露國はバルカン諸國民を其保護の下に置きて、以て其勢力を張らんとし、一八七八年のサンステフアノ條約により擴大されたるブルガリヤに依りて、此の目的を達せんとせしが、各國の反對ありて終に其目的を達せざりき。而もロシヤのダーダネルス海峡に對する野心は終始一貫して、一日も減退せしこと無かりき

八　露國中等社會の成立及び其勢力

從來ロシヤの侵略は專ら宮廷及び官僚の政策にして、人民の之に關與することと少なかりき。之れロシヤには中等社會の缺乏せる爲め、輿論の勢力微々たりしに因れり。然るに彼のクリミヤ戰役の後、アレクサンドル二世帝が鋭意内治の改良を圖り、一八六一年三月三日の勅令に依り農奴廢止を宣言せしことは、幾多の戰爭幾多の條約等よりも、更に一層重要なる結果を生じ、之に依りて民間の經濟を著しく發展せしめ、且つ社會狀態に著しき變動を起さしめたり。當時農奴は全國を通じて二千三百萬人あり。貴族の反對盛んなりしに拘らず彼等を解放せしは、非常の英斷なりと謂はざるべからず　此勅令に依り各農民は十二年間に地主に金錢を拂ひ又は勞働を爲して其耕作地面を

得ることゝ定めたるが、皇帝は帝室の御料地に於ける農奴に對しては、無代償にて耕地を與へたり。而して一八六三年までに此勅令の目的は大體に於いて貫徹されたり。然れども素より多年の習慣を一時に破りたる事なれば、其の良結果は急に得られずして、種々なる波瀾を生ぜしに拘はらず、これにより年を經ると共に、大地主の貴族中に資産を減少せし者生ずると同時に、農民中にも富裕と成る者生じ、斯くて漸次に多少の健全なる中等社會の出現を見るに至れり。

此社會改良中にも不利不便の少からざりしは、彼等が政治に干與するの權利無かりしことにて、官吏の腐敗行政上の不行屆を如何ともする能はざりしことなり。更に不利なりしは、解放されたる農奴の耕地は村の共有地と成り各箇の特殊財産と成らざりし故、各人の勉勵を促すこと尠かりしことなりしが、日露戰爭によりてロシヤ内國行政の腐敗暴露し、各地に騷擾起り、其結

果憲法發布せられ、人民に參政の權利を與へられたるのみならず、ストリピン(Strypin)首相と爲り、一九一〇年從來の共有財産制を廢して、農民各箇の財産と爲し、經濟に非常なる影響を與へたり。

由來ロシヤの中等社會は自由主義を旨とし、官僚の獨斷にて企つる膨脹策に反對せしが、參政權を得るに至り、國粹主義は却つて中等社會に盛んとなれり。蓋し汎スラヴ主義は彼等に取りて理想のみならず、實益上の必要を生じ、コンスタンチノープル領有に對する欲望は今や實際問題として輿論を支配せり。而して其の茲に至りしは、經濟上の理由大に存すればなり。

九　露國の經濟と輸入超過の絶對的必要

ロシヤはイギリス、フランス、ドイツ等の如く航海業保險業等未だ盛なら

ず又外國の債權を殆んど有せざるを以て、國民經濟上、對外貿易の輸出超過は其死活問題なり。殊に此輸出超過の必要を痛切に感ぜしめしは、一八九七年金貨本位制度を採りて以來、貴金屬輸入超過の傾向著しく、一八九六年より一九〇六年に至る十一年間の貴金屬輸入超過は、四億五千一百三十萬ルーブルに上れり。加ふるに露國外債の膨脹は最近に至りては著しく增進せり。茲に於いて外國貿易輸出超過は愈〻緊要となれり。幸にしてロシヤの輸出超過は年々增加しつゝあり、ロールバッハ監輯『露禍』第二冊アクセル・シュミット著『ロシヤの最終目的』(Das Endziel Russlands)中の表に據れば次の如し。

第一表　最近四十年間露國外國貿易の狀況

(貴金屬を除く、●は輸出超過)
(百萬ルーブル單位△は輸入超過)

年	輸出	輸入	超過	年	輸出	輸入	超過
一八七二	三七〇	四三五・二	△一〇八・二	一八七四	四三一・八	四七一・四	△三九・六
一八七三	三六四・四	四四三・〇	△七八・六	一八七五	三八二・〇	五三二・二	△一四九・二

年	輸出	輸入	超過	年	輸出	輸入	超過
一八七六	四〇〇、七	四七七、六	△七六、九	一八八九	七六六、〇	四三七、〇	●三三九、〇
一八七七	五二七、九	三二一、〇	●二〇六、九	一九〇〇	七一六、四	六二六、四	●九〇、〇
一八七八	六一八、二	五九五、六	●二二、六	一九〇一	七六一、六	五九三、二	●一六八、二
一八七九	六二七、七	五八七、七	●四〇、一	一九〇二	八六〇、三	五九九、二	●二六一、一
一八八〇	四九八、七	六二三、八	△一二四、一	一九〇三	一〇〇一、二	六八一、七	●三一九、五
一八八一	五〇六、四	五一七、七	△一一、三	一九〇四	一〇〇六、四	六五一、四	●三五五、〇
一八八二	六一七、八	五六六、八	●五一、〇	一九〇五	一〇七七、三	六三五、一	●四四一、二
一八八三	六四〇、三	五六一、九	●七八、四	一九〇六	一〇九四、九	八〇〇、七	●二九四、七
一八八四	五八九、九	五三八、〇	●五一、九	一九〇七	一〇五三、〇	八四七、四	●二〇五、二
一八八五	五三八、七	四三四、二	●一〇四、五	一九〇八	九九八、三	九一二、七	●八五、六
一八八六	四八八、五	四三八、二	●五〇、三	一九〇九	一四二七、七	九〇六、三	●五二、六
一八八七	六二三、〇	三九三、二	●二二九、八	一九一〇	一四四九、一	一〇八四、四	●三六四、六
一八八八	七九三、九	三九〇、七	●四〇三、二	一九一一	一五九一、四	一二六一、七	●四二九、七

ロシヤに於ける外國貿易の出口は、第一、黑海及びダーダネルス海峽、第二、バルト海、第三西方陸境、第四、白海、第五、太平洋なれども、最後の二者は全額より見れば殆ど數ふるに足らず。最も重要なるは黑海及びダーダネルス海峽を經由して行はるゝ貿易なり。而して黑海方面の貿易無かりせば、ロシヤは外國に對して、非常に不利の地に陷るべく、外債利子の支拂は不能と成り、國家は破產し、國民經濟は萎靡すべし。故に黑海方面の經濟的發展はロシヤの寸時も閑却し能はざる所なり。

一〇　黑海方面露國貿易の激增

第十九世紀七十年代の末より黑海貿易漸次盛況に赴けり、卽ち一八七七年露土戰役以前には露國の貿易は年々輸入超過せり。然れども、當時外債は現今

よりも遙かに少額なれば、其利子及び此輸入超過を、國内産出の金銀にて優に支拂ふことを得たり。而して此年よりして露國貿易は始めて輸出超過を示し、其額二億六百九十萬ルーブルに登れり。當時黒海方面の貿易は、輸出三千五百八十萬ルーブル、輸入一千六百十萬ルーブルにして、輸出超過は一千九百七十萬ルーブルに過ぎざりき。然るに一八八一—八九年に亙る九年間に、ロシヤの輸出超過總額は二十二億八千六百八十萬ルーブルに上りたるが、此中黒海方面の貿易は、同時期間輸出超過總額十五億一千五百十ルーブルにして、即ち露國貿易中の最も重要なる部分を占むるに至れり。而も露國貿易が更に急速の進歩を爲し、大なる意義を有するに至りしは、第二十世紀に入りてなり。即ち左の表を見る可し。

第二表　黒海に於ける最近輸入額　（百萬ルーブルを單位とす）

年	輸出	輸入	超過	年	輸出	輸入	超過
一九〇〇	二五六、一	八三、六	一七二、五	一九〇六	四二〇、二	八五、一	三三五、一
一九〇一	二九〇、八	九一、八	一九九、〇	一九〇七	四二八、八	八二、〇	三四六、八
一九〇二	三八四、八	八二、六	三〇二、二	一九〇八	三八二、八	七四、三	三〇八、五
一九〇三	四五五、九	七九、五	三七六、四	一九〇九	六二八、二	七四、五	五五三、七
一九〇四	四五六、三	七八、九	三七七、四	一九一〇	六二七、七	七四、三	五四三、四
一九〇五	四五一、三	七六、四	三七四、九	一九一一	六三二、〇	九六、九	五三四、一

一方に於て外債は俄然增加し二十億ルーブルに上り、輸出超過の必要愈〻迫れり。而して南ロシヤの貿易は同時に非常に繁榮となり、一八八一—八九年間の輸出超過總額十五億一千五百十萬ルーブルに對し、一九〇三年—一一年間には、同三十七億五千三十萬ルーブルに達せり。故にロシヤの外國貿易は一九〇三—一一年間に黒海なかりせば、三十億一千七百九十萬ルーブルの輸

出超過を得ずして、七億三千二百萬ルーブルの輸入超過を生じ、ロシヤの爲めには實に由々しき大事となりしならん。

前に擧げたる表を見れば、ロシヤの貿易に於いて輸入は大なる意義なくして、其重要なるものは輸出に在り。何となれば、輸入は一八八〇年代の始に比して三割以上增加を見ず、然るに、同一期間に輸出は三十割以上の增加を示せり。而して輸入品は主として高價なる製造品なれば、鐵道の便宜に依り迅速に輸入することを得れども、輸出品は廉價なる原料を多量に出すを以つて、運賃高き鐵道輸送に適せず。從ひて海路に依らざるべからず。白海及太平洋は一は氷結し一は遠隔なり。又バルト海は主要なる原料產地たる南ロシヤを距ること遠し。之れ黑海が貿易の主要點となる所以なり。

此點はロシヤの沿岸貿易に徵すれば明かなり。一九一一年黑海よりする沿岸貿易總額は九千一百八十萬ルーブルなりき。沿岸貿易は主に黑海とバルト

海との貿易にして、殆んど歐洲大陸を迂廻するものなれども、內地鐵道よりも廉價なればなり。

一一　黑海方面貿易の重要なる理由

ロシヤの黑海貿易が斯く重要なるは、同國の經濟的重點が、現在は南ロシヤに在る爲なり。南ロシヤ諸港の輸出額は一九一一年に七億六千十萬プード。その中穀物五億九千二百十萬、石腦油製造物四千五百九十萬、マンガン礦三千七百萬、鐵礦三千八百九十萬、併せて七億一千三百九十萬プードにて、卽ち黑海地方總輸出額の九割三分を占む。以て南ロシヤが多量の廉價物の產地にして、其輸出は黑海を經由せざるべからざるを知るべし。

輸出品中殊に重要なるは穀物にして、南ロシヤの輸出總額中七割七分五厘

を占むるのみならず、全國の輸出貿易に於いても最も主要の物なり。卽ち最後の三年間に於けるシロヤ總輸出額の五割三分四厘を占む。表によりて穀物輸出狀態を示さん。

第三表　露國最近穀物輸出入額（百萬プードを單位とす）

甲

年	黑海方面より	全國より
一八八一	九九、五	二一三、八
一八八二	一四〇、四	三〇九、九
一八八三	一五四、二	三五七、二
一八八四	一五四、七	三三一、七
一八八五	一九一、四	三四四、〇

乙

年	黑海方面より	全國より
一八八六	一四六、九	二七八、五
一八八七	二三三、〇	二九三、〇
一八八八	三四〇、一	五四八、二
一八八九	三〇一、八	四六六、七
……	……	……
一九〇〇	二二〇、一	四二〇、二
一九〇一	二八〇、七	四六六、六
一九〇二	四一六、二	五七九、七
一九〇三	五〇一、七	六五二、〇
一九〇四	四七三、八	六四八、八
一九〇五	四七三、九	六九七、五
一九〇六	四三八、四	五九〇、八
一九〇七	三七一、四	四七〇、四
一九〇八	三一一、五	四〇四、九
一九〇九	五四五、三	七六一、九
一九一〇	六二五、六	八四八、六
一九一一	五九二、一	八二四、一

此表に據り、ロシヤの穀物輸出が、如何に急速に增加しつゝあるかを知る可し。卽ち一八八一年頃に比すれば、其四倍に上れり。而して其增加は主として南ロシヤに在り。卽ち南ロシヤの諸港より最後の三年間に輸出せる所は、ロシヤ輸出穀物全部の七割二分七厘に當れり。之を一八八一—八三年の僅かに四割四分七厘なりしに比して、其增加の非常なるを知るべし。

由來、黑海沿岸の地は太古に於いても、ギリシヤの穀物庫と稱せられたり。

蓋しその土質肥沃、氣候溫暖にして、農業に適せるが故にして、農奴解放以來次第に改良せられ、近年益〻產出盛大と成れり。しかも今日其生產力は未だ十分の發達を遂げたるにあらず。アクセル・シュミットに從へば、ドイツにては、一ヘクタールの耕地より小麥二千四百キログラム、若しくは大麥二千二百キログラムを得べきに、ロシヤに於ては、同じ大さの耕地より、小麥六百若しくは大麥千キログラムを收むるのみ。されば今後耕作肥料等に改良を施さば、南露の穀物產出額は今より遙かに大なる額に上るべきなり。

一二　露國重點の南遷

由是觀之、南ロシヤの穀物輸出は、實にロシヤ外國貿易の大黑柱といふべし。此事は穀物各種によりて比較せば一層明瞭となるなり。

第四表　露國最近輸出穀物各種輸出額比較　（百萬プードを單位とす）

甲

年	小麥 黑海方面	小麥 全國	ライ麥 黑海方面	ライ麥 全國	大麥 黑海方面	大麥 全國	燕麥 黑海方面	燕麥 全國	玉蜀黍 黑海方面	玉蜀黍 全國
一八八一	五七、九	八二、三	七、八	三九、三	一八、三	二六、一	一、二	三九、二	一三、四	一五、八
一八八二	八六、三	一二八、三	一二、〇	五一、三	二〇、二	三四、四	二、三	五六、四	一五、五	一八、五
一八八三	八二、二	一四一、二	二〇、七	六九、八	三四、三	五〇、二	二、六	六〇、三	二、一	一三、〇

乙

年	小麥 黑海方面	小麥 全國	ライ麥 黑海方面	ライ麥 全國	大麥 黑海方面	大麥 全國	燕麥 黑海方面	燕麥 全國	玉蜀黍 黑海方面	玉蜀黍 全國
一九〇九	二五二、七	三一四、五	二三、六	三五、五	二〇八、五	二一九、二	一五、三	七四、七	三五、八	四一、一
一九一〇	三二一、九	三七四、六	三五、二	四〇、五	二三五、一	二四四、七	八、〇	八三、九	二四、〇	二七、四
一九一一	二〇八、四	二四〇、五	四五、五	五三、九	二四三、八	二六二、六	八、一	八五、一	七二、三	八一、八

右表に據れば、小麥、大麥、玉蜀黍の殆ど全部は黑海より輸出せられ、ライ麥の大部分も黑海を經由す。唯燕麥及ライ麥の小部分はバルト海岸を經由す。之を一八八〇年代と比すれば思半ばに過ぐるものあり。而して南露穀物輸出の增加せる中、大麥は十倍に達し、之に次いで玉蜀黍及小麥も非常に增加せり。要之穀物輸出貿易の發展は黑海に在り、而して穀物產出增加も亦南ロシヤに在り。

次に南ロシヤに於いて礦物輸出貿易の發展せしことにも注意せざるべからず。卽ちナフタ及マンガン鑛は其八割八分は黑海より輸出せらる。而して鐵は稍之に下り七割一分九厘なり。これ鐵鑛は重にポーランドにありて、ドイツの國境に近く、且つドイツの投資多きを以つて、鐵道に依りて多量に陸路輸出せらるゝに因るなり。但し此鐵輸出は二十世紀に始まりしと謂ふも可なり而してナフタ及びマンガンの輸出は一八八〇年以後の事にして、一八七七

年露土戰爭當時には、穀物以外に黑海より輸出せらるゝ物殆ど無かりき。

一三　露國輿論の强硬

以上に由りて觀察すれば、一八七〇年代以來ロシヤの國民經濟の重點は北ロシヤより南ロシヤに移り、此傾向は益〻增進の勢あり。從つてロシヤの國家的中心も今や旣に南に移りてペトログラード及び北ロシヤにあらざらんとす。先にペートル大帝は露國をして、ヨーロッパ列國の間に伍せしめんとせし爲めに都をペトログラードに遷したり。然るに今やロシヤは假令ポーランド、リトアニヤ、フィンランド、バルト海の地方を失ふも、尙强國たるの地位を失はざるべしと雖も、今若し南露のウクライネ地方を奪はれんか、ロシヤは到底大國として存立し能はざるべし。之れドイツ人も唱へロシヤ人も自

覺せる所なり。

要するにロシヤの重點は今や北露より南露に遷りつゝあり。而して南露の鍵はダーダネル海峽に在り。故にロシヤ人は之を自覺して其發展の必須條件としてコンスタンチノープルを獲得せんことを期せり。これもはや啻に朝廷若くは官僚の野心にあらずして實にロシヤ全國民の輿論なり。其事たる責任あるロシヤの朝野の名士の言に徵して明らかなり。今左に僅に其二三の例を摘出するに止めん。

現戰爭の始に於て、露國自由黨の意見を發表せる『露國が此戰爭に期待する所は何ぞや』と題する書の第一章に、經濟學者ツガン・バラノフスキ(Tugan Baranovski)は曰く『黑海より自由の出口を求むるロシヤの歷史的衝動は、今度こそは好成績を收むべく、我南部地方の經濟的發展の爲めに、光輝に滿ちたる前途を開く可し。此方面に於て、露國は此大戰に供する總の吾人の重

大なる犧牲に對する價値ある賞與を受くるを得べし』と。又某自由黨員は『露の兩頭の鷲は一頭を以つて西を視、一頭を以て東を睨めども、南方に向つては兩頭を以て睥睨せり』と。議員グレミキン(Gremykin)は其演說中に『黑海に於ける露國の幸福なる將來は、コンスタンチノープルの城下に於いて漸次に實現せられん』と云へり。教授ミトロファノフ(Prof. Mitrofanov)は謂へらく『露の南下の衝動は歷史的經濟的必要なり。此衝動に反對する國は直に我敵なり』と。教授ミリュコッフ(Miljvkov)曰く『吾人は此戰爭を起したるにあらず。然れども自ら招かざりし爲めに、吾人は一層ダーダネルスを取る前に於いて、戰爭を止むべからずとす。露國は充分大にして、此以上に領土を增すの必要なし。然れども海に出づる一の自由なる口を得ざれば、未だ其最後の形體を完備せりといふ可からず』と。

此外斯の如き言辭は枚擧に遑あらず。唯最後に加へたきは、現戰爭の初より

深く露國の内地に入りて農民の救濟事業に盡瘁しつゝありたる、米國の名士ホイットモア(Whitmore)氏が、過日藥品買入れの爲めに來朝せる際、同僚姉崎教授に語りたる所に據れば、露國農民等は皆コンスタンチノープル領有を必然の事とし、又モスコー遷都説も亦民間に頗る盛んなりといふ、以つて大勢の趨く所を窺知すべきなり。

一四　露獨間調和の不可能

英國も今日に至りては、露のコンスタンチノープル及びダーダネルスに對する熱望の妨止し難きを認めたるもの〻如く、サー・ハリー・ジョンストンは一九一二年出版の『英國外交の常識』といふ書に、『エジプト・ベルギー及び南ペルシャに對しては、他人の手を觸れしむべからず』と主張すれども、コンス

タンチノープルに對しては、何等固執する所なし。又一昨年同氏が王立地理學會に於いて、アフリカに就いて演説せる時に示せる未來の理想地圖には、アジヤ・トルコの大部分をロシヤの色彩に染めたり。

又最近ドイツの戰地地圖に據れば、英は既にダーダネルス海峽外の島々を占領したり。これ或はロシヤがコンスタンチノープルを占領する場合に對する準備にあらずや。最後に大正五年十二月二日、露相トレポフが政見發表の際『一九一五年英、佛、以政府はダーダネルス及びコンスタンチノープルに對する露國の權利を最も確實なる方式に於いて認定せり』と言明せり。

然るに、一方にドイツの輿論は前述の如く、エルベ・エウフラテスといふ大聯邦帝國を夢想し、之を以つてドイツの世界的大國たり得る必要資格とするもの〻如し。之れロシヤの理想と正反對にして、而も雙方單に理想に止らず、痛切なる經濟上の必要を自覺せり。シュミットは彼の『ロシヤの最終目的』

の最後の章に『コンスタンチノープルに關する露獨の爭鬪に就きては、調和し得べき點毫末も無し』と斷言し、又同書序文にロールバッハは『露は其立場よりすれば、黑海と地中海の通路の支配を獲得せざるべからず。然れども、之れドイツを世界的國民中より永久に除外するに依りてのみ、爲し得るものなれば、吾人は我東隣の國民に充分なる打擊を加へて、彼等をして平和時に於いてのみ、トルコの支配の下にある海峽を通過し得ることを條件とする、和約に滿足せしむるより外に策なきなり』。哲學者エドワルド・ハルトマン(Edward Hartmann)は雜誌『現代』(Gegenwart)紙上に於いて、百尺竿頭更に一歩を進め、『ロシヤよりドニエプル河の流域地、ウクライネ(Ukraine)(南露一體の最豐饒なる地方)を割きて一の緩衝國を作り、ロシヤをして復東方に膨脹すること無からしむべし』と說き、此說も亦相應の贊成者を有す。今以上の諸說を、前に揭げたる露國論客の言ふ所に對照せば、獨露主張の相容れ難きを知るべし。然も吾人

をして、尙强ひて兩者間調和の計畫二三を審査せしめよ。

露獨國是の調和の第一策として、コンスタンチノープル及びダーダネルス海峽を中立とするの議あり。これは獨人のみならず英人中にも斯る考を抱く者あれども、多數ロシヤ人の言に鑑み、彼等の到底同意する能はざる南とを知る可し。何となれば、かくてはドイツの勢力を一掃せざる限り、こロシヤ產物輸出の中途を塞がれ、大打擊を受くるの虞常に絶えざるべけばれなり。故に露國人は平時戰時を問はずダーダネル海峽通過の自由を得ること、換言せばコンスタンチノープル附近を領有するに至らざれば、滿足する能はらざるべし。露國の此主張あることはドイツ人も認むる所にして、それが爲にこそ彼等は一層反對を表する所以なり。ロールバッハは『ロシヤのコンスタンチノープルを支配することは、大國としてドイツの將來の發展を撲滅するものなり』と斷言せり。卽ち之に依りてドイツは、全く東方の政治上經濟上の發展の

前途を遮斷せられ、イギリスに對する世界政策も行はれざるに至るべし。されば此問題は最後の解決を得るまでは、殘存すべき性質のものにして、到底一時的以上の融和の見込なきものとす、

第二の調和策はロシヤをしてアジヤ・トルコに對するドイツの希望を容れしめ、其代償としてペルシヤに進出の自由を與へ、斯くて獨露同盟して、イギリスに對抗せんとするなり。ドイツ人中に此種見解を抱く者あるやを知らずと雖も、之亦一策なるが如し。しかも前述の如くロシヤのコンスタンチノープル占領は其死活問題なり。故に露は悅んでペルシヤを受く可しと雖も、其代償としてコンスタンチノープル及びアジヤ・トルコを、ドイツの手に委ぬるが如きことは、假令露國政府に其意ありとも、ロシヤ國民の輿論が斷じて許さざる所なり。殊に民衆の輿論の力はロシヤに於いて近來益〻强大と成りつゝあり。此戰爭の結果益〻然らん。一度之を思へば、此種の讓步は到底望む可

きにあらざるなり。

一五 結論

ドイツ若し大勝せば、其希ふ南ロシヤを取り、且つバルカン及びトルコを全く其勢力の下に置かん。しかも現狀にては斯の如き事到底有り得べからず。或は現戰爭は各國皆疲れ姑息的平和に終ることあるべし。而もコンスタンチノープル問題は其最後の解決に歸著する迄、永久に殘存すべきなり。こは決して第三者の揣摩臆測に非ず。今や露獨兩國人の互に自覺せる所にして、兩者愚に判然たる死十字を見るなり

世上には露獨同盟して東洋に來るを恐るゝ者あれども、そは甚しき愚論なりとは、予の曾て本誌に於いて述べし所なるが、今日に至り此感益〻深し。

何となれば、ロシヤが北支那及朝鮮に發展を計りしは、ロシヤが未だドイツの大野心の奈邊にあるかを覺らざりし前にして、且つ日本の實力の侮り難きを知らざりし結果なり。加之コンスタンチノープルに關し、今日の如く痛切なる經濟的關係を有せざりし時代の事なりき。但し日露戰爭以前、一九〇〇年クロパトキン將軍の建白書に據れば、南ロシヤの發展を唱へ、先づ第一に西方に向ふべし、而して未來には其國家發展上、英、日、米を敵手とするの覺悟を要すと述べたり。

若しロシヤがコンスタンチノープル及ダーダネルス海峽を其勢力範圍に收め、非常に膨脹するときは、地中海を以て滿足せざる時來るべしと雖も、領有後その發展に幾多の年月を要することあるべし。而して吾人は豫め之に處するの覺悟は勿論必要なり。然れども露獨が連合して東に向ふは、假令萬一實現可能なりとするも、斷じて戰後十數年以内の事にはあらざるべし。

現戰爭に依りて英、露、獨何れが最大の成功を收むるとも、世界將來の形勢には大變動を來すべきこと疑を容れず。故に吾人は我國の前途に關してあらゆる場合に備へざるべからず。吾人は人道主義に基き東亞の指導者たる大方針を確立し、公を秉り平を持して冷靜に世界に望み、以て將來の形勢を通觀せざるべからず、素より吾人は各國の間に徒らに超然たるを期すべきにあらず、然れども國家間の同盟と謂ひ合從と呼ぶも、皆それ〴〵時と場合に依りて生ずる事なり。故に吾人は深く茲に留意し、言說を輕々しくせざる樣大いに戒めざるべからず。

（大正六年一月）

最近露國革命の由來

一　ロシヤの建國

最近のロシヤの革命に付ては、尙ほ報道の不明なる事多く　其の眞相には遽かに判斷を下すことを得ないが、併し今日迄の成行きより考ふれば、要するに此の革命は民主主義と獨裁主義との衝突、並に外國崇拜主義と國粹發揮運動との衝突に起因するものと見て宜いと思ふ。ロシヤの歷史に於ては、外國感化と國粹發揮運動との交代が殆んど其の全部を成し、それが獨裁君生制と發情烈しきロシヤの國民性と連結して、幾多の悲慘なる黨派的の反撥陷穽、宮廷陰謀、又は弑逆、暗殺、革命等を起してゐるのである。

ロシヤ人の發達の跡を見るに、其の初めに於ては常に外國人の力を借りて居る。之れが爲め自然外國の勢力の加はつて居るのに對して、國粹的反撥心が常に一方に存して、それが蓄積して、屢〻反動となつて爆發して居る。第九世紀頃のロシヤの有樣は如何といふに、スラヴ人は幾多の部落に別れて、相互の間に何等統一なく、而して海濱及び大河の口は、すべて他の人種に占められて居た。然るに紀元八六二年、ドイツ人種の一分枝なるノルマン族の一酋長ルーリックといふ者、スウェーデンより來りて國を建て、後ち其の子孫がノヴゴロッドを都として遂にロシヤを統一した。故にロシヤの建國はロシヤ人自ら成したるに非ずして、外國人の力に依つて成されたのである。但しそのノルマン人の數は一般のスラヴ人に比すれば甚だ少なかりし爲めに、久しからずしてスラヴ人に吸收され、こゝにロシヤ純然たるスラヴ人の大國となつた。

斯くして十三世紀の中頃に至りて、ロシヤは元朝の蒙古人に依つて征服され、爾後二百餘年間ロシヤは蒙古人に從つて居た。其の間には血も混じ、蒙古人の感化も受けた。ロシヤ人が今日ヨーロッパ的性質とアジヤ的性質とを併有するのは此の爲めである。然るに其の間に於てルーリックの子孫なるモスコー大公は次第に勢力を得、やがて蒙古人の羈絆を脱した。イヴアン三世の如きは、ギリシヤ帝國(卽ち西のローマ帝國)が、トルコの爲めに滅ぼされた時、ギリシヤの皇女を娶りて、自らギリシヤの繼承者を以て任じて居た位に勢力があつた。イヴアン四世もなか〳〵の豪傑で、大に國勢を張り、ギリシヤの文化をも大に輸入した。

二　ロマノフ家の興起

其後ロシヤに非常なる內亂起り、國內は四分五裂し、加ふるにスウェーデン、ポーランドの干涉あり。就中ポーランド王シギスモンドの如きは、ロシヤを併呑せんと企て、モスコーは遂に其手に落ちた。而かもロシヤの貴族等は節操なく、今日甲を戴き明日乙に媚びて、自利之れ計るといふ有樣にて、國內は亂雜を極め、人民は非常に苦しんだ。されば、恰かもフランスの百年戰役の際、人民の國粹的感情と宗敎心が結晶して、オルレアンの少女ジャンヌ・ダルクを出したやうに、ロシヤに於ても、却つて平民の間に燃ゆるが如き敵愾心と、熱烈なる宗敎心が盛んに起り、各所に奇蹟を見るとの風評が傳へられた。こゝに於て、トロイツ市のヂオニシウス以下の僧侶等は蹶起して、各市に熱烈なる激文を送つた。

此の激文がニズニ市に達し、同市の高僧が市民を集めて、之を讀み上げると、屠者コスマ・ミニンは慷慨措く能はずして、忽ちに立ちて、

『我等若しモスコー帝國を救濟せんと欲せば、我等の所有する土地財産を惜むべからず、我等の家屋を賣らしめよ！　我等をして、我妻子を勞働に服せしめよ！　而して正敎の爲めに敢て奮鬪し、且つ我等を戰場に導くべき一箇人の人物を求めしめよ！』

と叫んだ。群衆は直ちに之に雷同し、ミニン以下各〻所有物の三分の一を献じ、中には一婦人にして、一萬二千ルーブルの所有財産中、一萬ルーブルを献じた者もあつた。去れば其他の人も、若し獻金を躊躇せば、忽ち强迫を受くるの勢であつたから、義擧の資金は直ちに出來た。而して群衆はミニンに此の軍資金の管理を託し、ミニンは萬事自分等に依託するとの條件の下に、之を諾した。而かもミニンは身微賤にして威嚴少なきを思ひ、位階名望ある人を得て、首領となさんと欲し、ドミトリ・ポヤルスキ公が曩にモスコーに於て傷を受けて、スタロドウヴに靜養せる事を聞き、自ら往きて公に請ひ、軍の司令

權を執らしめた。

人々は、從來露國貴族以下の間に節操は守られず、誓ひは屢〻破られたる爲め、神は天罰をロシヤに下し給ひたりと信じ、誠心誠意神に罪を赦されん事を乞ふ爲め、全國の人民が三日間斷食せん事を決議した。こゝに於て他の諸市の人民は、之れに應じて續々參集したが、傭兵の如きものは之を却けて仲間には入れなかつた。斯くて此の義軍は、市長、牧師等が先頭に立ち、神像を高く捧げて、一六一二年八月モスコーに迫り、十月二十二日遂にポーランド兵をして開城せしめた。

翌一六一三年には、ロシヤの各種階級を代表する一大國會が開かれ、劈頭に建國の事を議して。而して君主制を立つる事に決し、且つ君主は外國人たるべからずと定めてモスコー開城の際ポーランド兵の還附したる捕虜、ミカエル・ロマノフと云ふ、僅か十五歲の人を選立して位に卽けた。蓋しロマノフ

家はルーリック家とも多少緣戚であり、餘程舊い名家であつて、且つ從來の系圖の上に更に汚點が無かつたからである。之が卽ち三百五十年間ロシヤに君臨したるロマノフ王朝の起源である。

之を要するにロマノフ家の起つたのは、その君主の力にあらずして、人民が外國の羈絆を脫する爲めに選立したものである。故に君主が外國に內通して、國粹黨を抑へんとすると疑はれた時に、之を廢したと云ふことは、其の因緣の無いことではない。

三　露國親獨主義の由來

ミカエル・ロマノフ家は、斯くポーランドを排して興りたるが故に、ポーランドとは始終反對の立場にあつた。然れども、ロシヤへは外國殊にドイツ

の商人が多く入込んで、次第に西ヨーロッパの文明は輸入された。其他オランダ、スウィス、スコットランド等の人民が斷えず入り來り、次第にロシヤを感化した。併し乍ら、ロシヤが西ヨーロッパ風を大に入れたのは、ペートル大帝の時代からである。

海に出る事はロシヤの常に努めたことで、イヴァン四世の如き、バルト海に出でんとして、スウィーデン及びポーランドと戰つたが、成功しなかつた。次でペートル大帝は、初めトルコと戰つて黑海に出でんとし、一時アゾフを取つた、尙ほ西ヨーロッパ諸國に使節を派遣し、トルコに對する大同盟を作らんとした。而してペートル大帝は自ら微服して、此使節の一行に加はり、親しく水夫或は大工等の爲す業まで手にかけて、凡ゆる技術を見學し、歸來大に留學生を派遣し、又外國人を多數雇ひ入れて、非常な改革を行つた。

されどペートル大帝の改革は、主として物質的の文明を輸入するに力めた

れば、多く淺薄皮相に流れた、例へば當時の西ヨーロッパの流行に習ひ、蓄髯頗の風を廢せんとし、蓄髯稅を課したるが如き、或は西ヨーロッパの宴會を學鮮び、鵜の眞似をする烏の如く、亂醉喧囂の集會を催して得々たりしが如き、る滑稽な事が多かつた。但し大體よりいへば、從來の舊弊を打破して、大に新の空氣を入れたる効は確かにあつた。而して政府の幹部には多く外國人を用ゐ、長官はロシヤ人なりしも、實際の事務を執る次官以下の官吏には、多く外人を充てた。蓋し當時のロシヤ官吏は無能にして腐敗し、到底用ゐるに足らざりし爲めならんも、此等外人の勢力に對して、國粹的不平の盛んに起りし事も、亦爭はれぬ事實であつた。

四　露廷に於ける獨人の跋扈

一七二五年ペートル大帝死して、其の皇后カザリン一世が位に卽いた。元來カザリンはロシヤの名家の出にあらず、スウェーデンの一下婢上りで、下士官の妻であつたのを、ペートルが引上げて皇后としたのである。然るに親獨派のメンシコッフ以下、及び之れを助くるドイツ人オステルマン、ミューニック等が、國粹黨の興らんことを恐れて、之れを立てたのである。

其後二年、一七二七年に至り、カザリン死し、ペートル大帝の孫ペートル二世が位に卽いた。此人は僅か十一歲の少年で、やはり親獨派が之を支配して居た。然るにペートルは一七三〇年に疱瘡にて死し、こゝにロマノフ家の男系は斷えたる爲め、ペートル大帝の姪アンが位に卽いた。

アンはドイツのホルスタイン公の夫人なりし故、やはり親獨主義であつた。されば彼女の寵臣ドイツ人エルネスト・ビロン權を專らにし、又宮內大臣レーヴェンウォルド、外務大臣オステルマン、其他コルフ、カイゼルリング、

ラッシー、ミューニック、ビスマルク、エルネストの弟グスターフ・ビロン以下ドイツ人の勢力は非常なもので、ロシヤ人は政府に於て屬僚的の地位より外得られなかつた。但しドイツ人はロシヤ人よりも職務に勉勵にして、頭腦明晰なる爲め、實際彼等は役に立つた。併し乍ら又彼等は勢ひに乘じて、隨分ひどくロシヤ人を虐待した。

一七四〇年アン死し、其の姪ドイツ、メクレンブルグ公夫人アンの生んだイヴアン六世が、位に卽いた。イヴアン六世は幼少にしてドイツ人は却つて益ゝ勢力を得たのである。

五　國粹黨の勝利

此時に當り、ペートル大帝の孫女エリザベスは陰謀を企て、國粹黨の頭に立

ちて、一七四一年十二月六日の夜、宮中革命を起し、イヴアン以下ミューニック、オステルマン、レーヴュンウォルド、メングデン等を捕縛し、イヴアンを廢してエリザベス自ら女帝となり、オステルマン以下のドイツ黨をそれぞれ或は刑し、或は追放した。卽ち此の革命は親獨黨に對する國粹黨の勝利であつた。詩人ロモノフは、この際詩を賦してエリザベスの德を讚嘆した。中に彼女を以つて、

『ロシヤを一夜にしてエジプトの奴隷の狀態より救ひたるモーゼス、外國の洪水よりロシヤを救ひたるノア』

に比して激賞して居る。而してペトログラードの處々に國粹黨の一揆起り、フィンランドに於ては、兵士は外國士官に背きて大騷動を起した。

エリザベスはプロシヤ王フリデリック二世(大王)の反覆常なきを憎み、遂にフランス、オーストリヤ、サクソニヤと同盟し、斯くて起つた七年戰爭に

於て、露軍はフレデリックの背後を衝て、東プロシヤに亂入し、一時プロシヤの都ベルリンを陷れた事がある。殊に一七五〇年、キュネルスドルフの合戰には、プロシヤ軍は散々に敗北して、フレデリクは僅かに四十騎の兵と共に戰場を逃れた。彼れが其の宰相ヒンケンスタインに送つた書に曰く、

『我が四萬八千人の軍は、僅かに三千人を殘して、總て崩潰中なり。是れ實に殘酷なる打擊なり。戰爭の影響は戰爭の損害よりも大なるべし、余は最早何等の資力を存せず、想ふに總ては絕望的なり、余は生きて祖國の亡滅を見ざるべし、余は汝に永久の告別を爲す』と。

何んぞその語の悲慘なる哀調を以つて充てるや。而して此の打擊こそ、ドイツ人、殊にプロシヤ人に對する、ロシヤ人の復讐の最初の返擊とも見るべきである。時にフレデリック王のみならず、他の同盟諸國亦大に戰爭に疲れて居たが、獨りエリザベス女帝は和議を欲せず、且つ『余はフレデリックを

十二分に打擊し、東プロシヤを我が領土と爲すにあらずんば、斷じて干戈ををさめざる可し』と言つて居た。

六　親獨主義のペートル三世

然るにエリザベス女帝の妹たる、ホルスタイン・ゴットルプ公夫人アンの生んだペートル三世は、エリザベスに養はれて太子となつた。此の人は大なる親獨主義者であつて、殊にフレデリック大王を非常に崇敬して居つた。故に七年戰爭の前に當り、ロシヤがフランス、オーストリヤ、サクソニヤと共に、對プロシヤの祕密條約を結びし時には、密かに之をフレデリックに報じた。さてこそフレデリックは機先を制して、不意にサクソニヤを攻めたのである。併しエリザベス女帝も薄々此の事を覺り、其後は作戰計畫、其他を決して太子に知ら

せなかつた。

然るに一七六二年、エリザベス女帝死し、ロマノフ家の直系は茲に絶え、太子ペートルが立ちてペートル三世と稱した。兼て彼がプロシャ及び自己を非常に崇拜することを知つて居た、フレデリック二世は大に喜び、使臣を派して其の卽位を賀せしめ、且つ和議を申入れ、而して其の使臣に、止むを得ざれば東プロシヤをロシヤに割讓するも可なりとの內意を含めた。然るにペートル三世は無條件にて和議を結びしのみならず、却つてプロシヤと攻守同盟を締結した。實に彼れはロシヤ風よりもプロシヤ風を愛し、先にロシヤの太子となるに當り、新敎よりギリシヤ敎に改宗せりと雖も、依然ロシヤの宗敎を賤しめ、寺院の壯嚴なる儀式の際にも、官女等と戲れ、僧侶を嘲り、其他ロシヤの士卒の服裝が、プロシヤ式にあらざるを公然嘲り罵り、彼等を憤慨せしめたことは屢〻であつた。

皇帝となりて後、ペートル三世はプロシヤ流の服裝或は練兵を輸入し、又專らホルスタイン大隊のみを寵遇せる爲め、軍隊內には非常な不平が起つた。朝廷の儀式もすべてドイツ流を學ばしめ、又た盛んにビールを呑みて常に亂醉の有樣であつた。之に依りて國粹黨は最も深く彼れを怨んだ。

七　國粹主義のカザリン女帝

ペートル三世の后カザリンは、身は元ドイツの一小國アンハルト侯の女にして、父はプロシヤの官吏なりしも、頗る英邁の資をそなへ、夫帝が彼女を冷遇し、時には彼女を打擲せるを憤り、遂に國粹黨と手を握り、自ら黨の首領となり、一七六二年六月宮中革命を行つた。卽ち六月八日、皇帝はペトログラードより二十哩を距つるオラニエンバウムに在り、カザリンはペトログラー

ドとオラニエバウム間にあるペテロホーフに在つたが、此日彼女は急に都に歸つて冬宮に入ると、軍隊は皆な之れに從つた。而してペートル三世は、クロンスタットに到り、『余は皇帝なり』と云へるに對し、守備隊長タルイチンは『最早皇帝はなし』と答へて從はざりし爲め、歸つてローミューに着したが、彼は大に落膽狼狽し、千五百人の忠誠なるホルスタイン人の護衛兵を有せるに拘らず、忽ち位を辭した。

その退位の後六日、カザリンの寵臣オルロフは、二人の弟を伴ひ、ペテルホーフにペートルを訪ねて、何事をか談判した。その使命は不明なるも、ペートルは之れに從はなかつたのである、腕力家のオルロフは其處にて格闘をはじめ、オルロフは遂に皇帝を床上に押へ附けて、手を以つて之を締め殺した。皇帝の屍體の頸にオルロフの指の黑き痕が殘つて居たが、彼れは腸の病にて死したる事に發表せられ、皇后カザリンはカザリン二世として位に卽い

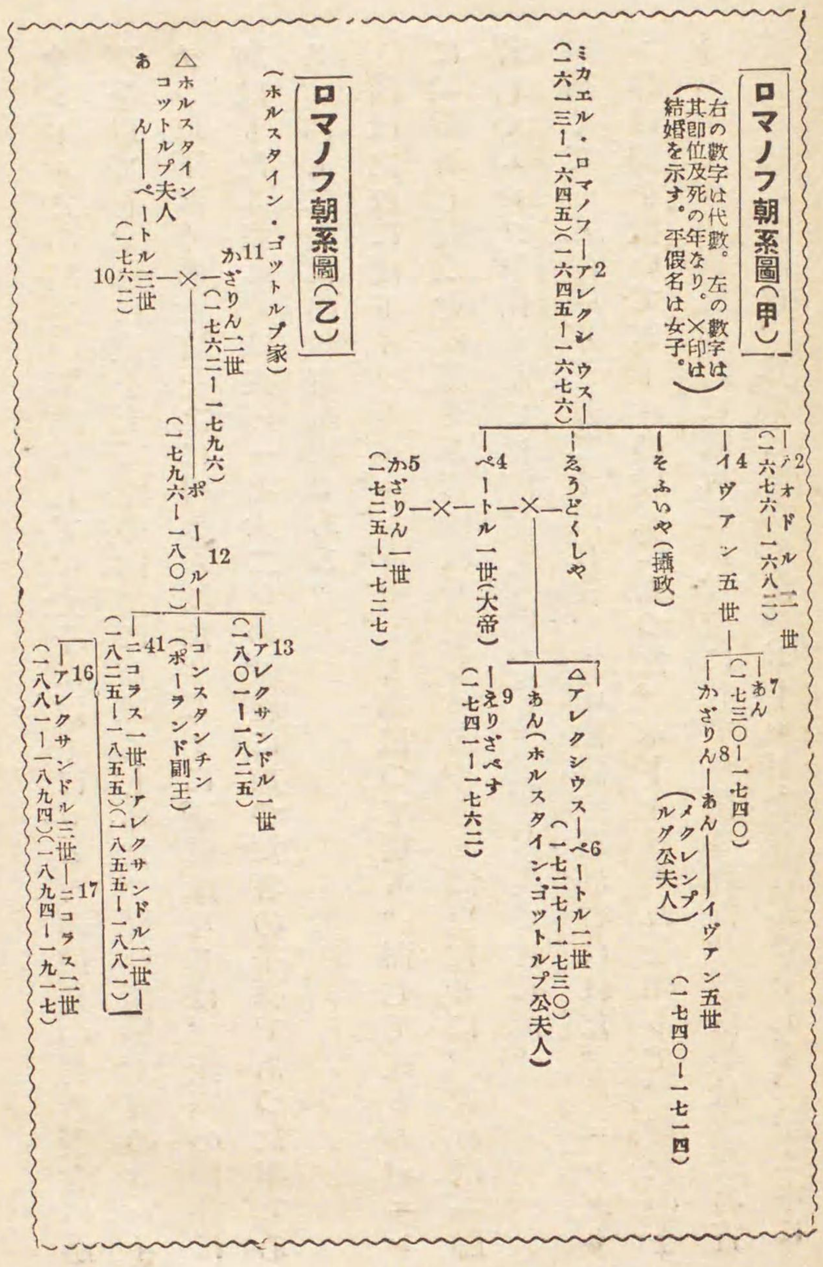
た。

カザリン二世は西ヨーロッパ、殊にフランスの文化の輸入に力めたが、彼れは國粹的ロシヤ主義を採りて、大にロシヤの國粹を發揚し、二度迄ポーランドを分割せしめて其の大部分を併せ、又コンスタンチノープルを取りて都と爲さん考もあつた。故に彼れはロシヤの第二の建設者と云ふべきである。而して彼女はプロシヤに對しては、攻守同盟を破棄したが、强ひてプロシヤを攻める事もしなかつた。後ちフランスに革命起り、カザリンは革命暴徒に關して、いろ〳〵烈しき攻擊的宣言を爲したるも、そは寧ろオーストリヤ、プロシヤを煽動して、フランスに向はしめ、其間にポーランドを併呑せんとする政略であつた。

八　親佛主義のポール帝

然るに一七九六年にカザリン二世に繼いだ其子ポール帝は、初め佛の革命軍を敵として烈しく戰ひたるが、ナポレオンが巧みに彼れの歡心を買へる爲め、忽ち豹變してナポレオン崇拜者となり、ナポレオン黨と同盟し、佛露聯合軍を組織して印度を衝かんとする大計畫をさへ立てた。然るに彼れがナポレオンの大陸封鎖に同意せる爲め、茲に貴族の大反對を惹起した。蓋し貴族は大抵大地主にして、その穀物麻等の農產物輸出の最大得意はイギリスなるが爲め、若し大陸を封鎖せんか、重要輸出を杜絕して經濟上大なる不利を見るからである。

由來ロシヤは極端なる獨裁主義の國であつて、之を緩和すべき何等の機關もないから、若し皇帝にして强硬なる輿論に聽かざれば、忽ち宮廷革命の如き事を仕出かすのは常である。故に今や一八〇一年に、再び悲慘なる弑虐が行はれた。パニン伯その陰謀の主謀者となり、且つ伯はポールと太子アレク



サンドルとの間を中傷離間して、太子に說くにロシヤの國是の爲め廢立の必要を以てし、終に彼をして此の陰謀に加はらしめた。又近衞兵士官のタルイチン以下多くの士官を之に引き入れた。こゝに不思議なるは、此等の陰謀に加はりたる者多くは彼の一七六二年の弑虐に加つた者の子孫であつた事である。即ち二代目の弑逆系統である。

尙ほ之れにはドイツ人ベニングセンも加はつて居る。而して或る人パニンに、『帝若し退位を承諾せざる時は如何すべきや』と問ひたるに、彼れは『卿若しオムレツを作らんとせば、卵を割らざるべからず』と答へた。

斯くて一八〇一年三月二十三日夜、宮中陰謀が再び行はれた。ベニングセン等は劍を拔いてポールの寢室に入つた。ポールはそれを知りて、寢衣のまゝストーヴの屛風の蔭に隱れたが、忽にして見出された。逆臣等は讓位の宣言書を彼に差附け、其署名を求めた。ポールが之を肯んぜずして、爭ふ中に

ランプは顚覆し、室は暗黑となつた、その中に陰謀者の一人ニコラス・ツボフは皇帝を床上に抑へ、襟卷を以て之を締め殺した。翌日太子アレクサンドル一世は之を知りて大に驚き、素弑虐には關係がなかりしも、今や勢止むを得ず帝位に登りて、ナポレオンと絕緣した。

斯の如くロシヤにては外國との關係が、皇帝の身邊に禍を及ぼす事は、一再にして止らないのである。

九　自由主義感染

以上主としてロシヤに於ける外國勢力と、國粹運動との關係に就て述べたがこれより民主的運動對獨裁政治の關係を說くことゝする。ロシヤは以前には貴族と賤民の外に、中等社會は殆んど無く、百姓は農奴として、土地と離

る〻事を得ざる家畜の如きものなりし爲め、十九世紀の初めまで、ロシヤの人民そのものには活動は無かつた。

カザリン二世は何處までも獨裁君主であつたが、併し彼女はフランスの文學を愛し、又實行の考は無かつたけれども、フランスの自由論者にも同情して居た。デデローの負債に苦むを救つたことがある。從つて朝廷にフランス崇拜の風が起り、フランス書を讀む者も出來、自然軍隊の士官等の中にも自由主義に感染する者が出來た。其後革新文學の思想は〻〻流入し、後に政府は之を阻止せんとしたるも、一旦味ひたる美味は忘れられず、殊にナポレオンの戰爭の際には軍隊が多く外國にあり、又戰後もパリーに長く滯在した者などもあつて、自由平等の思想は次第に士官等に感染し、淺からず根柢を持つ樣になつて來た。アレクサンドル一世帝は、すべて革命といふ事は非常に嫌厭したけれども、自國内の言論に對して甚しき鎭壓手段を取らず、却つて自

己の軍隊中に革命の萠芽のある事さへも知らなかつた。

一八一七年には、『神聖なる祖國の友』と云ふ祕密結社が出來た。此の結社は人道を主とする世界主義を持する、フランス文學の感化を受けて、自由制度を希望するものであるにも拘らず、却つて頗る國粹的であつて、外國風を嫌つたのも、不思議の樣ではあるが、之卽ち十八世紀の人道主義に對して、十九世紀の國民主義の盛んになつて來た影響に過ぎないのである。而して此のロシヤの民主黨の中にも穩和派と急遽派とがあつて、ツルベツコイ侯爵の率ゐたる一派は立憲君主主義に傾き、ペステル大佐の率ゐたる一派は共和主義に傾いて居た。而かも彼等は孰れも革命に一致して居た。アレクサンドル帝は意外の事より父の弑虐者の首領に推され、その下手人を罰する事も出來なかつた人である。故に彼れの性質は時に反對の現象を呈したが、併し彼れは人民を憫れみ、自由主義にあらざるも、詩的の美はしき感情を有して居た。彼が

神聖同盟を主唱したのも、全く慈母の如く民を愛するといふ主趣に基いて居る。彼はポーランドを露本國と離して、特別の自治權を與へ、太弟コンスタンチンを其の副王としたるが如きも、亦この心から出て居るのであつた。故に彼の一生中には別に革命も起らなかつた。

一〇 軍隊の陰謀

一八二五年アレクサンドル一世帝死して子無きに依り、之を繼ぐべき者は正當の順序よりいへば、ポーランド副王たる太弟コンスタンチンであつた。然るに是より先コンスタンチンは自ら帝王たるの才能無しとし、又ブリチンスカ伯爵夫人を愛し之を棄てゝ位に卽くに忍びず、一八二二年、其の繼承權を棄權した。こゝに於てアレクサンドルは末弟ニコラスを皇儲と定めた。併し

如何なる理由であるか、此の事は祕密に附せられ、唯之れに關する文書を複寫せしめ、之をモスコーに於ける帝國參議院、高等宗教會議、及び元老院の記錄の中に祕藏せしめた。

去れば、一八二五年十二月一日、アレクサンドル一世死するや、傳統者は彼の文書に依りて、ペトログラードに於てニコラスを帝位に卽かしめんとした。然るにニコラスは、『我れ其の資格無し、ワルソーに在るコンスタンチン親王こそ帝王たるべし』といひ、コンスタンチンに對し率先して臣下の誓ひを爲し、軍隊にも同じ誓を爲さしめて、之をワルソーに通知した。然るにコンスタンチンは此の希望に應じてペトログラードに來らんとはせず、却つて書面を以て自分が先きに繼承權を辭したる旨を告げ、同時にニコラス親王に對して忠誠の辭を送つた。斯くて三週間を經たるも、コンスタンチンは初めの言を守つて遂に動かず、十二月二十四日に至り、ニコラスは漸く位に卽く事を

承諾し、ニコラス二世と稱した。此事まことに我が仁德帝と菟道の稚郎子との讓位の事蹟に似たる珍しい事件であるが、此の間の三週間は、官吏並に軍隊は適從する所を知らず、大に方向に迷ふたのであつた。

是れより前、革命黨の一團は、一八二六年元旦を以て事を擧げんと計畫中なりしが、コンスタンチンとニコラスと讓位爭の爲め、官民大に方向に迷ひたると、殊に軍隊が二度迄最も神聖なるべき忠誠の誓を仕直したるために、忠君の誓に關して稍輕蔑の念が萠したので、陰謀者は此の人心動搖の機を利用せんとて、其の計畫を繰上げ、十二月廿六日に事を起した。

併し彼等の煽動に乘りたるは、僅かにモスコーに於ける近衞兵及び海兵の一部に過ぎなかつた。而かも此等の兵は憲法の何たるをも解し得ざる無學文盲の者のみであつたから、巨魁等は難解の事を縷々説明する代りに、分り易く簡單に、『我等はコンスタンチン皇帝及び其の皇后のコンスチツチオーネ(憲

法)の爲めに事を起すものなり』と云ふ事丈けを呑み込ましめて誘惑した。さて十二月廿六日は、ニコラス皇帝に對し軍隊の宣誓式のあるべき日であつたが、内二三千人の兵は宣誓を拒絶して一揆を起し、『コンスタンチン皇帝萬歳、コンスチツチオーネ皇后萬歳』と叫んだが、之れに應ずる者は無かつたので、其の巨魁等も事成らずと見て來らず、只だ主謀者の一人ツルベツコイ侯は恐怖の餘り政府に自首した。こゝに於て五人の主謀者は刑戮せられ、百二十一人はシベリヤに流刑に處せられ、或は輕懲役に處せられた。

一一　アレクサンドル二世の農奴解放

ニコラス一世帝は大に國粹を發揮せんと欲しトルコと開戰した。然るにナポレオン三世はイギリス及びサルヂニヤと結んで之れに反對し、こゝに所謂

クリミヤ戰爭が起つた。而して一八五五年九月八日にはセバストポーとが陷り。其前三月二日にニコラス一世は死んだので、太子はアレクサンドル二世として位に卽いた。

アレクサンドル二世帝位に卽くや、大に讓步して先づ外國と和睦した。帝は戰鬪的行爲に懲り、平和主義を維持し、少くもヨーロッパに於ては斷然兵を戢めて、內部の改良に力を入れた。即ちアレクサンドル二世は先づ大に陸軍を縮少し、四年間新兵の募集を休み、二千四百萬ルーブルの未納稅金を免除し、又一八二六年の革命の罪人を大赦し、出版の取締をやゝ緩め又小學校敎育の改良を計つた。

殊に彼れの成したる事業中最も大なるものとして特筆すべきは、一八六一年三月三日の勅令に依り農奴を解放した事である。當時農奴の數は全國に二千三百萬人あつた、之を開放するに對し貴族は大に反對したるも、遂に一八

六三年迄に全國に涉りて殆んどその實行を了つた。就中帝室領に於ては、農奴解放は同年何等の報酬を求めずして、農奴に其土地を下附した。此の以外には、尙ほ或る勞働若くは或る金高を年賦を以て、地主に支拂はしめ、これを農奴の所有とした。但し、それを個人の所有とせずして、一村の共有地として與へたのは大なる誤であつた。併し乍ら多少弊害はあつたに拘らず、之れに依つて農奴間に新しく發展の途が開け、一方貴族中にも以前程の餘裕を失ひ、斯くして多くの中等社會を作る上に頗る好結果を見た。

斯の如くアレクサンドル二世は、初めは鋭意內政の改良を計つたが、一八六三年、ポーランド人が獨立の反旗を擧ぐるに及んで、アレクサンドル二世は從來餘りに寬大なりしは、却つて不得策であつたと考へ、茲に方針を全く變更して、ポーランド鎭壓後は全く之を露化する事につとめ、內部に於ても再び元の壓政に戻つて來た。

一八七七年ロシヤはトルコと開戰し、翌年サン・ステフアノの條約を結んで、之れによりてロシヤは大ブルガリヤを作り、之を露の保護國と爲し、以てバルカン半島に大勢力を振はんとしたが、イギリス、及びオーストリヤの反對と、ビスマルクがオーストリヤを後援せるとに依り、ベルリン會議の結果、此の戰爭はロシヤが數十萬の士卒と五十億ルーブルの金を費消したるに拘らず、其の效果は甚だ微々たるものとなつた。而してそれに對する不平は內部に於て種々の騷動を惹起し、殊に戰爭中に政吏の腐敗を曝露する等の事あつて、それが刺戟となつて遂に虛無黨と云ふものを起すに至つた。

二　虛無黨の由來

ロシヤの虛無黨の父と云はれたるミカエル・バクニンは、ドイツ、スウィ

ス、フランス等を遊歷し、各國の社會主義者に逢ひ、遂に社會主義を信じて、彼の歐洲動亂の年なる、一八四九年には社會黨の大同盟を作り、世界の各帝國を破壞せんと企てゝ捕へられ、一八五五年にシベリヤに流されたが、一八六〇年にシベリヤを脫して、日本を經て遂にイギリスに行き、後スウィスに於て客死した。

バクニンの所說は非常にロシヤ人を動かした。殊に當時は恰かもスラヴ國粹論の漸く勃興した時に方り、國粹論はバクニンの感化を受けて、スラヴ國粹大同盟運動となり、ロシヤ、プロシヤ、オーストリヤ其他にあるスラヴ人の社會主義大同盟を起さんとし、一八四七年より一八七八年迄活動を續けた。これは社會主義とは全く異りたる無政府主義、卽ち極端なる個人主義を採る一派であつて、學者文人方面に之に從ふ者が多かつた。併しこれも現狀破壞を主張する點に於て、社會主義と一致して居た。之れはニヒリズム（虛無主義）

と稱せられ、文豪ツルゲニエフが、フランスの社會黨の先輩プルードンの說の中にあつた語を、其儘ロシヤで用ゐたものである。而して此の說を採る者は、右に言へるが如く學者文人の集團であつて、寧ろ空想に耽つて居るに過ぎないのであつたが、バクニンの一派と結ぶに至つて、一種激烈なる虛無黨を成立せしめた。

ロシヤ人は非常に感情强烈なる人種である。之れは一にはロシヤの自然が風光明眉或は壯嚴崇敬等の趣を缺いて、帝國の大部は非常に氣候が寒く、且つ屋內蟄居が多い。此等の周圍の感化と、國民性と、政府と敎會との酷烈なる壓迫の歷史と、不完全なる社會組織とが、遂に敎育ある者を驅つて、悲觀的破壞的の空想に走らしめ、敎育無き者を怠惰耽酒の境に陷らしめたのである。又彼等はロシヤはアジヤ並にヨーロッパの兩性を有して、世界を統一する天職を有すと信ずる者多く、殊に此の自負心は古今の英雄ナポレオンを倒して

以來益々强くなつた。然るにトルコの戰爭は甚だ不利益の局を結びしのみならず、此の戰爭に就き官吏の腐敗、御用商人の跋扈等の事實の曝露せる爲め、人民は失望と屈辱と憤慨と怨恨を以て充たされ、之れがやがて政府に對する攻擊となつて現はれたのである。

一三　虛無黨の跳梁政府の三大主義

虛無黨は斯る氣運に乘じて大なる勢力を得て來た。卽ち政治は當時全く獨裁であつて、人民の政治思想も幼稚であり、又其意志發表の機關もなかつた。從つて思想の發表は猛烈過激の手段を取るに至つた。大學其他の學校に於ても、青年男女の學生は政治に熱中し、一知半解の知識を以て騷動暗殺等に其平生の鬱憤を晴さんとし、之を以て主義に殉ずる勇壯なる義擧と信ずるに至

り、是よりして暴擧續發するに至つた。

一八七八年、ペトログラードの警部長トレポフが少女ベラ・ザスリッツに暗殺されたるを初めとし、同年に總政院第三局長メセンツェッフ將軍、翌年六月にはハルコフの總督クラポトキン侯爵、同四月にはメセンツェッフの後繼者ドレンテリンの如きが、相次いで殺された。又アレクサンドル二世帝に對する暗殺の企圖も屢々發露した。殊に著しきは一八八〇年二月十七日夜には、ペトログラード冬宮の宴會室を爆發せしめ、死者十人、負傷者四十八人の多數を出した。此等はすべて暴徒中の中央委員の指揮に依るものである。或る場合には、大膽にも暗殺を都市の各所に大々的に豫告を爲して、警察のあらゆる警戒にも拘らず、之を實行する事もあつた。

政府に於ては彼等の審問を普通の裁判に附せず、直ちに軍法會議に附した。而かも捕縛されたる者は頑として祕密を守り、之を嚴刑に處するも、其の繼承

者を威嚇するに足らなかつた。アレクサンドルは、一方に於て非常に嚴重に鎭壓策を講ずると共に、一方人民に多少滿足を與へ、其反對を緩和せんと欲し、一八八一年三月九日、地方自治制の擴張、貴族及都市自治體の代表者を樞密顧問院に入れる事等に關する勅令に署名し、十三日朝を以つて官報にて公布すべき事に定めて觀兵式に臨んだ。然るに虛無黨は之を知らず、當日爆彈を投じて皇帝を弑虐し、以て帝の計畫を空しくした。

茲に於て太子アレクサンドル三世位を繼いだ。此時教務院長ポビェドノスチェッフが大いに西ヨーロッパに於ける宗教に對する無信仰、及び議院政治の弊害を論じて、ロシヤを救濟するには、獨裁政治、正教統一、國粹黨膨脹の三つに依るべき事を唱へたるに、アレクサンドル三世は卽ち此說に贊成して、父の署名した勅令を其儘握潰して公にせず、言論を壓迫し、大學の監督を嚴にし、地方議會の權力を制限し、新教の一派スツンヂストを迫害し、又

ユダヤ人には僅に西ロシヤの市内に居る事を許して、地方議會及び學校に入るを禁じ、又市内に財産を有し、農業に從事する事を許さなかつた。彼の文豪理想家トルストイ伯が獅子吼を爲して、大に農民其他の爲めに自由を唱へたのは、之れに感じたからである。されど虛無黨の運動は、其の兇暴の爲め稍〻一般の同情を失ひたると、且つ此の壓迫に依り一時鎭壓された。

一四　民間の動搖頻起

一八九四年に、ニコラス二世が位に卽いた。彼れは溫良なれども、意志薄弱にして、ポビエドノスチェッフは依然勢力を振つた。しかも帝治世の初めは頗ぶる好望を與へた。卽ち內政の上に種々改良が加へられた。卽ちウィッテは用ゐられて、十一年間大藏大臣の職に在つて、一八九七年には金貨本位を採

用し、一八九九年には各地の石炭地を旅行して、大に工業の發展を計り、又ナフタ製造を奬勵し、鐵道の國有を計り、一九〇一年にはシベリヤ鐵道を完成し、一方に火酒專賣を行ひ、之に依り人民に節酒せしむることを得なかつたが、爲めに政府の收入は大に增し、尙ほ外國、主にフランスより大に債を募りて財政を整理した。されどウィッテが間接稅を增したるが爲に非常に貧民を苦しめた。又工業奬勵の結果、職工の數を增し、其間に社會主義が大に傳播せる爲めに、一八九九年以來彼等の同盟罷業が頻々として起つた。

是に於て政府は反動を起し、再び壓制を初め、大學に干涉し、特に講堂を閉鎖した。爲めに學生等は益〻激昂し、一九〇一年には文部大臣ポコリエポッフは一學生の爲めに重傷を負はされたと云ふやうな事件も起つた。同時に政府は益〻國粹主義を發揮せんとして、フィンランド及びバルト海沿岸州人民を急激に露化せんことを計りて、種々迫害を加へ、自治制を廢止せんとし、

又一九〇三年にはポーランドに向つて大干渉を加へた。之れが爲め一九〇四年六月六日にはフィンランド總督ボブリコッフは屬吏シャウマンの爲めに殺され、コーカサスの副總督アンドレエッフは同年七月十八日に、壓制の本尊たるプレーベはペトログラードに於て同年七月二十八日に、孰れも無政府黨の爲めに暗殺された。

當時日露戰爭突如として起り、ロシヤ大敗の報相次いで至り、之に伴うて官僚の腐敗の事實續々曝露せられて、人心は非常に動搖して來たので、政府も人心緩和の必要を悟り、一九〇四年八月二十四日には體罰廢止、租稅輕減等に關する勅令、八月二十七日には死傷兵士の小兒教育に關する勅令を發表した。又溫和なるミルスキーが大臣となつた。然も能く人心の動搖を靜むるに足らないで、九月八日には後備兵召集に際して之れに從はざる者頗る多く、又大學生は學府の自由を唱道して騷動を起し。コサック兵の力に依りて漸く

鎭定された。

一五 革命運動起る

此等の騷動は、一九〇五年に至り漸く革命の色彩を帶びて來た、卽ち一九〇五年一月十七日、怪僧ガポンは十萬人の勞働者の署名せる歎願書を差出し、同二十三日ガポンは、多數の勞働者の先頭に立ちて强訴に及ばんとし、學生も之れは加はつた。然るに此群衆集團に向つて軍隊が射擊を加へたので、ガポン以下多くの死傷を出した。

玆に於て皇帝はトレポッフを都府の總督に任じ、大なる權力を與へ强力なる壓抑を試みしめたが人心は容易に鎭らず一月二十四日にはコヴノ及びモスコーに二十六日にはリガリブアウ、ドルパットに、一月三十日にはワルソー

に、二月九日にはゾスノヴィッツェ、ロヅ、スカルヂスコ等に於て市街戰鬪が始まつた。又二月二十四日にはモスコー、カザン、其他南西の鐵道員は同盟罷業を起し、三月四日にはガポンは革命を宣言し、五月一日にはワルソーに、六月二日にはペトログラードに、六月十八日及二十二日にはロヅに、六月二十九日にはオデッサに、七月二十四日にはニジニ・ノヴゴロドに、八月二十二日にはノウオ・ロシツク、並にポーランドの數市に、八月二十四日にはワルソーに、復市街騷動が始まつた。又十月には再びモスコーに鐵道員の罷業が起り、十月二十四日には外國交通は全然斷えた。尙ほ五月三十日には電信員の同盟罷業があつた。こゝに於て流石のポビエドノスチェッフも、敎務院長として權力を振ふこと能はず、十一月二十一日に辭職した。(千九百七年三月二十三日死せり)。而して十一月には內閣組織を變更し、一人の內閣議長の指揮に從ふことゝなり、六日にウィッテは卽ち內閣議長となり、人民に對し

大に讓步に力めた。

一六 國會招集

是れより先、保守黨の首領と信ぜられたるセルギウス太公は、モスコーに於て暗殺されたので、朝廷は大に恐れて、一九〇五年三月、國會を召集すべき事、非正敎者及び異人種に對する取扱の方針を改むる事等を約する勅令を出し、且つ言論の壓迫を緩めた。而して國民の中にも亦溫和なる改革派があつて、一九〇四年六月六日、モスコー市長及び地方議會の議員等は、政府に建白書を出して方針を改めん事を請ひ、又七月十九日より二十日に亙りモスコーに全國地方議會議員の大會を開き、政府に建白書を送つた。さてこそ前に述べた如く、ポビエドノスチェッフ等を免じ、ウィッテに命じて內閣組織を

變更せしめ、十一月六日、彼が內閣議長となつたのである。ウィッテは彼のモスコーの地方議會議員聯合大會を代表する所謂十月黨（十月の勅令に滿足せる人々）の首領シッポフを內閣に引入れて、相共に改革を行はんとしたるが、シッポフは同時に立憲民主黨なるカデット黨を率ゆるミリューコフ教授をも引入れて、温和保守黨と温和自由黨の聯合內閣の如きものを作るを條件とした。然るにミリューコフの入閣條件過大にして、此議成立せず、ミリューコフもシッポフも共に入閣しなかつた。

其後各所の軍隊及び軍艦中に一揆起り、モスコーにも騷動が起つた、而して政府部內も進步保守の兩黨勢力を爭ひ、行動區々一致せずして、撞著矛盾することが多かつた。卽ち內務大臣ヅルノヴォーは人民に對して嚴酷なる處分を行ひ益々人心を激せしめ、一方に於てはウィッテは新に招集すべき議會に殆んど普通選擧の如き選擧法を許した。卽ち當時の政府は兩頭蛇の有樣にて、

首腦たるべきニコラス二世帝は其の間に在つて躊躇逡巡、明かに決し兼ねて居た。

一七　帝政顚覆に至るまで

一九〇六年春、最初の國會議員選擧を行ひたるに、カデット黨最大多數を占め、勞働黨之れに次ぎ、温和保守黨たる十月黨は僅か五十八人、極端保守黨は殆んど全く無かつた。此の現象は却つて政府の保守黨の氣焰をあふり、ウィッテは免ぜられてゴレミキシ之れに代つた。

斯くて五月十日最初の國會が召集されたが、氣勢甚だ穩かならず、七月二十一日、遂に國會は解散された。こゝに於て政府最大の勢力家內務大臣ストリピンは、非常に嚴酷なる手段を以て民主黨を壓し、數千人を裁判無しに放

逐し、牢獄は罪人充滿の有樣を見るに至つた。而かも政府が斯の如く强硬なる方法に出でたるに拘らず、一九〇七年初めに行ひたる第二回の選擧の結果は、殆んど第一回と同樣にて、依然カデット黨が大多數を占めた。

これに對して政府は再び議會を解散し、益々壓迫を嚴密にし、多數の社會黨員を祕密裡に於てシベリヤに流し、二三年前牴觸せる罪の上にも溯りて、數百人を處罰した。之れが爲め官吏警察官の暗殺は相次いで起つた。斯くて同年秋第三回の選擧を行ひたるに今度は政府の干涉の結果、十月黨が最も多數を占めた。當時十月黨にては巨魁グッチコフが最も勢力を有し、政府と衝突を避けた。而して恰も一九〇九年及び一九一〇年には國內非常の豐作であつて、政府の財政も大に豐かとなつた。尙ほ茲にストリピンの功業として特筆すべきは、一九〇六年に提出したるミル卽ち村落共有地の制を廢して、農民が各々土地を私有するを得ることゝする法案が、一九一〇年に第三議會を通

過したる事である。此事若し實際に行れるに至らば、露國農家の發展の大刺戟となるのである。

之を要するに、ロシヤに於ては近年人民一般に自覺心を增し、又敎育進みて知識階級の數を增し政治に參與する事は、單純に人民の理想の爲めのみにあらずして、彼等の經濟的社會的發展が官僚の爲めに壓迫せらるゝ事を排斥せんとする運動なれば、勢却々猛烈である。故に國會は開けたるも、未だ眞の代議政體實現せられぬを以て、彼等は滿足が出來なかつたので、卽ち今回の大革命を起し、ロマノフ家の顚覆を見るに至つたのである。

元來官僚派の中にはドイツ種の人、親獨主義の人が少なからずあつて、確かに經驗手腕ある者も少なくない。爲めに經驗無き民黨は是れまで始終抑へられて來たのであるが、その不平が蓄積して終に爆發したのであるから、尙ほ官僚黨の捲土重來を恐れて、溫和君主主義と手を握ることが困難なのである。

一八　革命の內部原因

今度の出來事をフランスの大革命に較べると、面白い對照が澤山ある。第一ニコラス二世は好人物であるが決斷力が無いと云ふ事は、ルイ十六世に頗る似て居る。保守とも進歩とも明確り定まらず、時に動搖する點はよく一致して居る。此の動搖は最も厭ふべき事で、折角善意があつても、之が爲めに人民に疑はれ、怨まれ、惡まれて、一歩々々不利益の地位に陷り、遂には回復すべからざるやうな事にもなるものである。

又皇后アレクサンドラがドイツ生れドイツ贔屓であつたことは事實であるが、果して彼女が密にドイツに內通して居たと云ふ事は、新聞紙の報道のみでは判然しないが、フランスの革命の時にも恰度さう云ふ事があつて、ルイ

十四世の后マリー・アントアネットはオーストリヤの皇女で、フランスがオーストリヤに宣戰の日に、フランスの作戰計畫を密かに先方へ知らしたと云ふ事は、當時疑はれて居たけれども、今は史實として確かなる證明がある。

又フランスには王の支流にオルレアン公フイリップあり。非常な野心家で、自ら自由主義を標榜し、人民を煽動して騷動を起させ、あはよくば其騷動中に王を倒し、自ら取つて代らんとした事がある。今回もロマノフ家の中に其樣云ふ事實があつたか何うか、今はまだ明言はできない。

次にフランス大革命の初めには、誰人も共和政治を希望しては居らなかつた。革新文學の豫言者と云はれるルソーさへ『共和政治は小國若くは天人の集合には適するが、人間の集合する國、殊に佛の如き大國には弊害多くして到底實現に適せぬ』と云ふ意を述べて居る。夫れ故最初の國民議會には、一人の共和黨も無かつた。議員等皆立憲君主制を是として、君主政體の憲法を

作つたのである。然るに第二の國民議會に於ては、共和黨が大分に入りて、終に君主制を顚覆し、第三の憲法制定國民會に於て共和政治を作つた。之は何の爲めかといふと朝廷の方で、動もすれば陰謀に依りて民主黨を挫かんとし、終には外國の力を借りて之を行はんとするに至つたので、人民は次第に朝廷を疑ひ、或は其陰謀一度成功せば、折角に得たる自由を失ひ、元の封建的狀態に返りはせずや、加之、此事が外國の武力に依りて行はれはせぬか、左すれば人民の不幸不名譽此上もなしとの感念が次第に勢を得て來た。而して國民議會が王に迫りて墺國に宣戰せしめたのは、貴族等は先て外國政府に應援し、王及び王后も亦密に內通せりとの疑ひが——(事實さうであつた)——强くなるに從つて、人心が君主政治を離れて來て、斯る狀況で王室と手を握らんとする溫和黨は次第に勢を失ひ、過激黨が勢を得て來て、遂には共和政治の設立否、慘憺たる恐嚇政治さへ見るに至つたのである。

今度のロシャの革命が如何に成り行くや知らないが、目下假政府にある人は中流の人で、學問もあり愛國心もあり、佛國大革命の先例も知つて居るから、成る可くは立憲王制を希望して居るのであらうが、如何にせんロシャ人民一般の政事的知識の缺乏は、大革命時代の一般佛人に讓らない。夫れで一方に朝廷及び官僚派も中々才能あり術數に富んで居るから、油斷をすれば、帝室及び官僚派の人の背負投に掛る恐れがあるので、立憲君主制で落附くことが中々困難である。從つて過激黨が勢を得て、共和政治若くは更に夫よりも極端なものを生ぜぬとも限らぬ。而して目下ドイツと方に戰爭中であることが、此等の關係を一層複雜にせしむるのである。

一九　革命の外部的原因

次に宮中及び官僚に親獨派が多かつたと云ふ事は、前にも述べ來つた如く、一朝の事にあらずして、其中にはドイツで生れた人もあり、或はその子孫もあり、或はドイツに緣戚を有する人もあり、又はドイツに往來し、或はドイツ書を讀んでドイツ風を崇拜する人も少なからずある。而して疑ひも無くロシヤ人よりもドイツ人の方が組織的の才能、及び忠實に事務を執る事に於て勝つて居るから、此等の人が多く用ゐられ、而して其勢力を得た源泉に向つて崇拜の心を生じ、從つて此等の關係より、官僚はドイツに親しむ傾向を有したのも無理でないのである。

一方に又官僚社會は、今度の戰爭前後より民主主義が益〻盛んになり、戰爭中並に戰後に於て、更に發達する恐れがあるので、官僚政治保存上、早くドイツと單獨講和を結ぶを利として、之を密に希望した者もあつた樣である。

二〇 革命の前途

併し乍らドイツに對する民間の感情は、前にも言へるが如く深い經濟上の意味が含まれてあるのである。單に國粹を以てドイツを嫌ふのみでない。今やロシヤの經濟中心は、北より南に向つて動いて來て居る。蓋し農産物天産物等は主もにロシヤの南部に産し、而かも其等は廉價にして容積の多きものなれば、海路に依つて輸出する事が最も必要である。然るに海路南方に出でんとするには、ロシヤは黑海より地中海に出づる外に道がない。こゝに於てロシヤがコンスタンチノープルを占領すると云ふ事は、經濟上最も適切なる問題で、輿論も其處へ向いて來て居る。然るにドイツはアジヤ・トルコを其勢力範圍に入れる事は經濟上の發展より、又イギリスに對する世界政策上より、

近年最も適切に其の必要を感じ、而してバルカン半島を以つて、此アジヤ・トルコと連結する橋とせんとする希望がある。卽ちロシヤの南進とドイツの東進とは双方の死活的重要なる問題にして、而かも夫れが全然衝突するのである。

此他ドイツがロシヤ内の經濟上の企業に浸潤しつゝある事も、ロシヤ人の常に不快不安に思ふ所である。去ればロシヤとドイツの國情は氷炭相容れざるものとなつて居る。從つてロシヤに於ては此の輿論に反對する如何なる政府も、長く其の地位を保つ事は困難であらう。加之如上叙述せる如く、ロシヤの歴史は、常にドイツ反撥の國粹運動が絶えぬのであつた。

さて此の革命は何う成行くか知らぬが、若し立憲君主制が出來たならば、君主の威嚴と人民の自由の爲めに最も好かつたらうと思ふが、若し共和政治が出來るとせば、前途甚だ多難であらうと思ふ。蓋しロシヤ人は一般に知識

節制に乏しく、若し今回の戰爭に於て、ドイツより一段烈しく突き込まれるとせば、此の先十分に防ぎ得るや否やは、最もむづかしい問題である。フランス革命の時には、よく民兵を以て外國軍を破つたが、今日の戰爭は主もに機械の戰爭で昔とは大分違ふ。勇氣熱心のみにては勝利は得られない。併し乍ら若しロシヤの民心にして十分一致して居らんか、假令ドイツがペトログラードを陷れたりとするも、尙ほドイツが最終の勝を得たと言へない。ロシヤが連敗後反つて強くなる例は多くある。

之を要するに、ロシヤにては假令如何なる事が生起するとも獨裁政治を再び起す事は出來ぬであらう。併し乍ら、立憲君主政治若くは共和政治は平和をのみ愛するかと云ふと、必ずしもさうは言へない。以前の如き無謀の侵略は無からんも、組織的に適切なる利益多き方に膨脹する事は、却つて以前よりも確實になつて來るであらう。

（大正六年三月）

佛露革命比較論

一　序論

フランス大革命が第十八世紀末葉の大事件として、全ヨーロッパ大陸の大戰亂に關係せる如く、目今のロシヤ革命も亦第二十世紀初期に於ける大事件として、世界各大陸に跨る大戰に關係あり。唯、フランス革命は歐洲大戰亂の原因たりしに反し、ロシヤ革命は世界大戰亂の結果たり。双方の革命間に大いに類似せる點あると同時に、又大に相違せる點ありて、之を比較することは極めて興味あると共に、又極めて困難ならざるを得ず。是れ『歴史は繰返す』と云ふ事が半面の眞理にして、而も絶對的の眞理にあらざることを最

も良く說明するものなり。

吾人は先づ其の類似せる點を擧げ、然る後其の相異せる點を陳べ、更にロシヤの將來如何に就きて聊か言及する所あらんとす。

二　類似點第一

類似せる點の第一は双方が社會組織の缺陷を原因とせることとなり。卽ちフランスに於ては階級制度の不自然なる弊害として、貴族及高僧等のみ勢力を獨占し、人民の大多數(二十分の十九)を占むる平民階級——所謂中產階級をも含む——の權利は頗る抑壓せられ、知識資力の優越せる者も亦其當然占む可き地位を得ず。而して一方に負擔は却て右に反比例にして、貴族及高僧等は最少限度の負擔を有するのみなるに、平民階級殊に農民の金錢的、物質的、

勞力的負擔は非常に苛酷なりき。

ロシヤに於ても亦貴族は長き間權力を壟斷し、土地の大部分を所有せるに反し、農民は第十九世紀初半の頃までは土地に全然附屬せる奴隷なりき。而して一八六一年、アレクサンドル二世の農奴解放令により、多少の改良加へられたりと雖も、彼等は土地の私有を許されずして、村落の共有地として分耕するを得るに過ぎざりしを以て、依然として土地に束縛せらるゝの狀態にして、眞の自由を得ること能はざりき。斯くて上下の懸隔甚しくして、其間に何等之れを融和す可き機關組織なかりき。

三　類似點第二

類似點の第二、は双方の朝廷内に於ける風儀の頽廢と、之に伴ふ君家の威嚴

の失墜なり。フランスに於ては、王權强大にして君主萬能の有樣となり、ルイ十四世の時代に於て、君主の威嚴絶頂に達し、『朕は國家なり』と傲語し、盛んに禮容を設けしが、ルイ十五世に至り、朝廷の風儀次第に腐爛し、妓女娼婦の如き徒輩宮殿内に跋扈し、奢侈放恣の傾向頓に增大せるのみならず、恩給を亂賜する等の弊害蓄積したり。更にルイ十六世に至り、王は朴直方正の人なりしに拘らず、王后マリー・アントアネットは少くとも不謹愼なる所爲多かりし爲め、種々あられぬ風評を立てられ、縱令此等の風評は多く事實ならざりしとするも、其結果王室の威信を損すること大なりき。

ロシヤに於ても亦朝廷の風儀大いに紊れ、皇后アレクサンドラ・フェオドロヴナの如き、ラスプチン事件其他に關して、兎角の醜聲傳へられ、其他にも種々の風評朝廷の人々の上に行はれ、其間虛報多かる可しと雖も、從つて帝室に對する人民の侮蔑を買ふこと少からざりき。

四　類似點第三

類似點の第三は、双方共に戰爭と外交との失敗に因り、政府の威望を減じたることとなり。卽ちフランスにては、當時ルイ十四世の頻繁なる戰爭が、當初華々しき成功を收めしに、晩年に至り漸次振はず、ルイ十五世に及んで、佛軍は數々見苦しき敗北を繰返し、政府の外交も亦失敗を重ねたれば、政府の威信愈〻地に墮ち、負債のみ徒らに國帑を累する有樣なりき。

ロシヤも亦、日露戰役中敗北に次ぐに敗北を以てし、又目下の世界戰亂の連戰連敗に因りて、甚しく國威を汚し、外は列强の輕侮を受くるの端緒を開き、內は人民の不平をして益〻增長せしむるに至れり。

五　類似點第四

類似點の第四は、双方共に行政及財政の紊亂に苦みしことなり。卽ちフランスに於ては行政組織不完全にして、當時尙封建制度の遺物たる政治機關未だ全く除去せらるゝに至らず、爲めに行政上の混亂を生ぜしむること多く、加之政府諸官衙も、長官は皆貴族の出身にして、實務に通せざる爲め、名義上のみの長官にして、多くは萬事を屬僚に委ぬる有樣にして、私曲盛んに行はれ、各官省の間に連絡を缺き、加ふるに朝廷の浪費と外戰とに由りて、財政の困難其極に達せり、而して其の整理に百方糊塗策を弄したるも、悉く失敗に終れり。革命の直接原因は、實に此財政困難より逼り來れる、國家的破產を免れんとする最後の手段の結果なりき。

ロシヤに於ても、亦ツァールの政府は非常に行政弛廢し、賄賂請託等の醜事平然として行はるゝ有樣なりき。又其財政困難より來る逼迫は、革命前に於けるフランス程ならざりしとするも、巨大なる負債に對する利子のみにても決して少額ならず、加之、行政上幾多の缺陷を遺憾なく暴露し、又今回の大戰亂に際しての施設其宜しきを得ざりし爲め、種々の困難を簇出し、經濟上の關係と相俟ちて、大いに物資供給の窮乏を惹起せしめ、遂に革命の一原因となれり。

六 類似點第五

類似點の第五は、双方の人民が多年新文學の理想に浸染せるも、實際的政治的訓練を全く缺きたることとなり。佛國に於ては、人民一般にヴォルテール、

モンテスキュー、ルソー、及エンシクロペヂスト派の革新文學の波動を受けて、自由平等論を唱道せりと雖も、要するに破壞的にして建設的ならず。故に彼等一度政權を掌裡に收むるや徒らに舊制度を破壞するに急にして、實際の條理に背ける事を行ひて憚らざりき。一七八九年八月四日、國民議會は僅か一夜の會議に於て、封建的習慣を全廢しながら、而も之に代るべき新制度を設けざりし爲め、國内の秩序は終に崩解するに至れり。

又新憲法を制定するに當りて、彼等は先づ人權宣言と云ふ抽象的辭句の創案に多くの貴重なる時日を費し、焦眉の急に迫れる多くの實際問題を閑却せり。斯くて成りたる一七九〇年の憲法は、餘りに複雜煩細なる選擧制度を設けし爲め、人民は之が爲めに選擧に日も足らざる姿となり、甚しきに至りては、裁判官又は僧侶の如き、本來獨立にして上下の束縛を受けざる地位に在るべき職務の人々までも、選擧を經て就職せしむることとし、之に依り適當なる

人は候補者に立つを恥ぢ、徒らに野心家の運動を助長するに至れり。又人道主義の理想に耽り、一令を以て直ちに奴隷廢止を決行し、何等の準備若くは過渡期を設けずして、植民地の黑奴を解放し、其結果植民地に於て白人と黑人との間に激烈なる反目爭鬪を生ぜしめたり。是等は皆人民一般が理想に耽り、政治的訓練無かりし爲めなりと謂はざるべからず。

ロシヤに於ても亦極端なる專制政治行はれ、人民は全然政事に干與するを得ざりし爲め、且つ中流社會の數極めて少き爲め、一度政權人民に歸するや、彼等は恰も利刀を與へられたる嬰兒の如く、之を善用するの術を知らず、前後を思慮するの遑無く、理想に馳せて秩序の壞解をして、愈〻甚しからしむるのみなり。況んやロシヤ人は元來過度に理想に耽るの傾向あるを以つて、實際的方面より攻究するの猶豫を有せず、只管トルストイ以下の理想を實現せんとするに急にして、沒常識なる破壞のみ事とし、遂には自ら其結果を收容す

ること能はざるに至れり。

七　類似點第六

類似點の第六は、双方孰れも軍隊が主權者よりは寧ろ人民に接近せんとする傾向著しかりしことなり。卽ちフランスに於ては、階級制度の爲めに、貴族出身の將校と平民出身の兵士との間に融和を缺き、兵士は常に人民に接し、之に同情を寄せつゝありて、彼等を煽動する運動に感化し易かりき。故に朝廷が一度兵力を以て、人民を抑壓せんとするも、兵士は其命に對し充分に服從せざりき。此事實一度發見せられし以來、當時のフランス朝廷側の人々の氣勢忽ち挫折し、其態度は頓に軟弱となれり。

ロシヤに於ても、亦同樣にして、將卒の間に親愛の念慮薄く、兵士は次第

に民間の誘惑を受けて、危險思想を抱く者尠からざりき。斯くてツァールを『小父』と仰ぎ、盲從の機械の如くに看做され居たりし兵士は、一旦革命起るや殆んど一人のツァールの爲めに身命を抛たんとする者無かりき。

八　類似點第七

類似點の第七は、双方の朝廷内部に於て陰謀暗鬪の盛んに行はれしことなり。即ちフランスに於ては、ルイ十六世は初め善意を以て施政改革を行はんとせしも、頑固なる保守主義を奉ずる反對分子頗る勢力ありし爲め、其の志を果さず、王后マリー・アントアネット亦常に保守主義の爲めに盡力せり。又王族の内にオルレアン侯の如き簒位を企つる野心家ありて、王及王后をして不人望ならしめんとて、百方姦策を弄せり。而して王の性格優柔不斷にし

て、或時は人民の意に副はんとするも、徹底的なるを得ず。或時は之に抑壓を加へんとするも、亦徹底的なるを得ず、常に心定まらざりしを以て、遂に民間に人望と尊敬と信頼とを併せ失ふに至れり。

ロシヤの宮廷も亦、古來より陰謀暗鬪間斷無く行はれ、皇后黨、皇太后黨、大公黨等の朋黨を形成し、相競ひてツァールを自家藥籠中のものとして、他を排擠せんと計れり。是等朋黨の背後には、極端なる保守主義者より稍溫和なる者に至るまで、各種各樣の見解を有する大官互に自己の所志を貫かんと犇き、殊に某大公の如きは皇位を奪はんとの野心ありしと傳へらる。而してニコラス二世も亦固より好人物なれども、決斷に乏しかりしを以つて、一貫せる方針を執ることを得ず、政府の威信を確立するに足らざりき。

九　類似點第八

類似點の第八は、双方の君家が人民より敵國に内通するを疑はれたることなり。フランスにては、ルイ十六世の后マリー・アントアネットの結婚が全く政略的にして、彼女の母墺后マリヤ・テレサは、其愛娘を風儀の亂れたる佛廷に嫁せしむることに就きて躊躇せし時、宰相カウニッツ伯が『一の百合（佛王室の紋章）を獲んには、一の百合（卽ち皇女）を犧牲にせざるべからず』と云ひしにても明かなり。マリヤ・テレサは愛娘に別るゝに臨み、『汝は常に佛墺の間を親密ならしむることを務とせよ』と諭したり。されば一派の佛人等は彼女を『オーストリヤの女』と名けて、之を嫌疑の眼を以て見たり。果して彼女は革命初まるや、常に墺國の援助に依りて、人民の運動を壓せんとし、王も亦最後に之に同意したり。故にマリー・アントアネットは對墺宣戰の日、佛の作戰計畫を告ぐるの密書を其兄墺帝に送れり。ルイ十六世も亦墺國に走りて、其助を借らんとせり。此事實は現今史料上の確證あれども、當時は不

明なりき。然れども人民は大に王夫婦の擧動を疑ひ、之が爲めに終に王政を顚覆するのみならず、王を死刑に處し、以て反革命運動に對する背水の陣を張りたり。

ロシヤにても、皇后アレクサンドラ・フェオドロヴナはドイツ聯邦中のヘッセン大公アーネスト・ルイの妹にて、親獨主義の聞へあり。皇帝ニコラス二世も亦ドイツ帝ウィリヤム二世と竹馬の友たり。故に一旦輿論に逼られて、ドイツと開戰せるも、内心單獨講和を希望し、露軍必勝の勢をも妨げたりとさへ風評されたり。之等の風評の今日尙ほ確證なきことは、フランス革命當時ルイ十六世夫婦の親墺主義に關する風評の未だ確證なかりしが如し。然れども君家に對して斯かる賣國の疑惑が民心に存したることは、又ロマノフ家を倒さしむるの一大原因となりしなり。

一〇 相異點 第一

次に双方の革命の相異せる點を擧げんに、

第一に、フランスは歐洲各國中國民的統一の最も早く且最も良く行はれたる國にして、フランス人は實に併合地を同化することに於て、不可思議なる能力を有す、フランスに於ては領土の併合をレユニオン(Réunion)と云ふ。此語には暗に再併合卽ち恢復の義を含む。卽ち其土地が一度佛に屬したるとあるか、若くは屬す可き性質の者なるを併合したる如き感を起さしむ。フランスの領土併合は、ルイ十四世の時に最も多く行はれしが、其勢威隆々としてヨーロッパ文明の中心となり、フランス語が歐洲の朝廷語又は外交語として、一般に用ひらるゝに至りしは、此の時代に始まる程なりしを以て、併合せられた

る地域の人民も、却つて大國民の資格を得たることを喜びたり。而も王の臣下として、彼等の待遇は舊來の領土の人民と何等異る所無かりしが故に、其後に於ける佛國の領土擴張は同時に又、彼等の名譽幷に利益の擴張を意味したり。斯くて佛人は如何なる邊陬の地方に至るまでも『予はフランス國民なり』との一致せる信念と誇負とを有せり。

然るにロシヤは如何。ロシヤは最近三百年間に急激に膨脹して、茫漠たる大國となり、遂に各部の統一を失ふに至れり。卽ちポーランド、フィンランド、ウクライナの如き民族を異にするものを含み、殊に其の文明の程度がロシヤ本部に比して、寧ろ反つて優れるのみならず、經濟上に於ても之よりも更に發展せる部分あり、從て言語も思想も不統一にして、ポーランドはポーランドのみの國粹思想あり、ウクライナはウクライナのみの國粹思想あり、其他斯の如く各部特有の國粹思想あれども、ロシヤ全體としての國民的感情は比較

的に稀薄なるを免れず。

一一 相異點第二

相異點の第二は、革命當時に於けるフランス全體としての國民文明の程度は、ロシヤに優れ居たりしことなり。尤も佛の農民も當時甚しく無智なりしも、彈力性に富みて、事毎に活潑なる反應を呈せり。然るに露國の農民は唯蠢愚蒙迷にして、自己自身の現在及將來に就きて通觀すること全然不可能なり。フランスに於ては、教育ある分子比較的多數にして、常に革命の進展を指導せしに反し、露國に於ては、其數極めて少く且微力なり。卽ち佛國革命の如何なる時期に於ても、其中心人物は常に所謂中等階級の出身者なりき。國民議會に勢力を揮ひし議員ムニエー、マルエー、バイイー、ミラボー、シ

エースの如き、又ヴェルニオー、ブリッソー、ビュゾー、ローラン夫妻其他のジロンド黨の如きは勿論、當時の過激派たりしダントン、ロベスピエール、マラーの如き、孰れも中等階級にあらざるはなし。殊に過激派の中の最過激派たるマラーの如きは革命前には流行醫師として、相當に社會に位置を有し、學術上の研究著述も少からざりし程なりき。而してシャボー・ヴァレンヌ、カルノー以下恐嚇政治の中心たりし公安委員會委員の人物を見るも、亦悉く中產階級の出身なりき。

然るにロシヤに於ては、革命の最初期に在りては、中產階級の人々勢力を占めしも、其後次第に活動力を失ひ、教育無き過激思想の人々勢力を得る傾向逐日增大せり。要するに、ロシヤに於て中產階級の非常に少數なることは、此恐るべき傾向を誘起せし理由にして、我國の如きも、亦此の一國の首腦たる可き中等階級の次第に消滅し行くの傾向に對しては、大いに警戒すべき必要あ

りと信ず。

一二　相異點第三

相異點の第三は、フランス革命の理想には中心ありて、ロシヤ革命の理想には中心無きことなり。卽ち當時の佛人の理想は世界的自由の宣傳にして、而も此の理由宣傳に當りて、彼等は不知不識の間に國家主義を中心とせり。例之、隣國の人民を煽動して、其主權者に反かしめ。而も其成功するや、彼等をして自國を模範とせる新制度を布かしめ、佛國は之が保護者となれり。此の點に於てはフランス革命の中心人物の爲す所前後皆一致せし所にして、又當時に於ける輿論にも適合せる所なりき。斯くて自由宣傳の世界主義と國勢膨脹の國家主義とは、巧に合一せられて人民一般に浸潤し、此の理由に於ては、フラ

ンス各部の人心皆協同的劃一的なりき。故に佛人は此協同目的に向つて、擧國奮鬪の覺悟を有したり。

然るに、ロシヤに於ては、革命の理由に一貫せる中心を見出すこと能はず、階級々々、地方々々に依りて、又時期の前後に依りて、其實現せる所全く異れり。例之、ダーダネルス海峽へ突出の如きは、確に當初の輿論なりしに、戰爭繼續主義は次第に極端なる人道的平和主義に壓倒せられ、遂に近來に於ける彼等の理想は無併合無償金となり、更に一轉して『中產階級に對する勞働者の戰爭』となれり。此の社會階級戰爭の信條は、稍世界的色彩を帶ぶるものなれども、國家主義とは全然沒交涉なり。而も一方に於てはウクライナ、ポーランド、フィンランド等は、何事よりも先づ各自特有の國粹主義の保全を以て理想とする有樣なり。故にロシヤ革命に於ては、フランス革命に於けるが如き共同的理由は到底之を求むべからざるなり。

一三　相異點第四

相異點の第四は、フランス人は其主義の防衛及び宣傳の爲め、厭くまで奮闘を辭せざりしに、ロシヤ人は大亂の初に盛んなりし敵愾心も次第に萎靡振はず、終に極端なる平和主義の爲めに壓倒さるゝに至りしことなり。フランスは革命の初、人民が外國に對し挑戰的態度を取りしに由りて、列國の出兵となりしも、一度外國兵侵入するに及び、玆に國家的死活戰開始せられたり。卽ち人民一般に國家の爲めに戰ふの念慮漲り、彼等が彼の戰慄に値する過激暴戾なる恐嚇政治すら、暫く之を忍びたるも、亦全く之が爲めに外ならざりしなり。而して敵を國內より擊退するや、忽ち攻勢を取りて外國に攻入り、其主義擴張と國家的膨脹とを計れり。

ロシヤに於ては、現大戰にツァール政府の疲弊せるに乘じ、革命行はれしが、當初のダーダネルス海峽進出の如き攻擊的意味何時しか忘却せられ、戰爭は遂に純然たる防禦的のものとなれり。斯くてポーランド、クルランド等敵の手中に在るも、ロシヤ人の多くは之に對し、風馬牛と云はざる迄も比較的冷靜なる態度を執れり。蓋し共同的愛國心に乏しき彼等は、一地方の喪失に震撼さるゝこと佛人の如く酷烈ならざればなり。而して一般人民が最も痛切に感ずる所は、戰爭の慘禍幷に之より生ずる諸種の困難に對する不平なり。ロマノフ帝統は之が爲めに倒れ、中產階級に依りて一時盛んに主張せられし、ダーダネルス海峽への突出論も亦之が爲めに徹底せざりき。斯くして彼等は只管戰爭の慘禍を脫せんとするに急にして、フランス革命に於けるが如き奮闘の意氣無し。故に戰爭繼續を主張せるルヴォフ公、ロヂヤンコ、ミリューコフ等國民自由黨其他の中產階級代表者、又はケレンスキーを中心とせる穩和主義

の社會黨代表者は相次いで失脚し、極端的平和主義の過激派獨り民心を支配するに至れり。

一四　相異點第五

相異點の第五は、フランス革命が外國勢力に依る擾亂を容さゞりしに反し、ロシヤ革命が其の虞れ甚大なることなり。卽ちフランスに於ては國粹的感情旺盛にして、且文明程度全歐洲に冠たりしを以て、外國より助力を受くることを潔しとせざりき。而して外國人のフランスに歸化したる者は、却てフランスに同化せられ、之が爲めに奮鬪することを辭せざりき。

然るにロシヤに於ては、ペートル大帝が西歐文明を輸入するに際し、多くの外國人を用ゐし爲め、爾來此の風遺り、外國人及其子孫宮廷の內外に勢力

を振へり。彼等外國人及び其子孫は、文明の程度高き國より低き國に移り來りしことなるを以て、祖國に對する親愛追慕の念已まざりき。又バルト海沿岸地方（エストニヤ、リヴォニヤ、クルランド）にはドイツ種の人民多く、ドイツ的國粹主義の瀰漫せるを見る。故にツヴールの宮廷に於ても諸外國の崇拜黨ありて、互に暗鬪を事とせしが、就中ドイツ人の勢力强盛なりき。又ドイツ人はロシヤ國內全般に亙りて、經濟上に隱然たる大勢力を培養せるを以て、此等の關係よりロシヤ革命は純ロシヤ的なるを得ずして、若干の外國的分子を混入せり。

一五　相異點第六

相異點の第六は、雙方に於ける軍隊の士氣に大差あることなり。卽ちフラン

スに於ては國王の舊軍隊は革命の爭亂の際規律を失ひ、崩解して其影を潛め、新軍隊は初め殆んど戰鬪力なき烏合の衆に過ぎざりしも、其後國防の必要上恐嚇政治に依りて、新たに規律ある軍隊を新造し、初めて全國皆兵主義を宣傳し、恐嚇手段を以て兵員及物資の徵發を行ひ、階級に拘泥せず、材能拔群の者若くは軍事的鍛練を經たる者を卒伍の間よりも拔擢し、又多數の犧牲を拂ふを物ともせず、密集團を形成して、敵の一角を突破すると云ふ、簡單にして有效なる新戰術を發明し、之に依りて當初烏合の衆も能く外國の傭兵隊を擊破することを得たり。蓋し當時に在りては諸外國は皆傭兵を用ゐしが故に、軍事に訓練あれども、犧牲を恐れて複雜なる戰鬪運動を行ひつゝありしなり 斯くてフランス民兵の軍事的經驗次第に增加すると共に、教育氣慨ある中產階級の從軍する者愈〻多かりしかば、勇敢熟練の軍隊となり了り、此の新軍隊中よりナポレオン、モロー、ネイ、ランヌの如き名將輩出し、遂にフランス軍は一

時歐洲無比の强兵となるに至れり。而して爲政者は斯かる軍隊の助を借りて事を爲すを得たり。

然るにロシヤに於ては、未だ新軍隊組織の計畫すら無く、舊來の軍隊は佛國革命の時の如く、規律頽廢して底止する所を知らざらんとす。唯コサックの如き變則の軍隊は、規律を保つこと比較的長かりしもの〻如しと雖も、統率者に拔群の偉材無かりし爲めか、漸次他のロシヤ軍と其揆を一にせんとしつゝあり。禍亂の鎭定は主として軍隊の力に俟たざるべからざるに、斯くては國內の紛糾を收拾するの機は竟に到らざるべし。

一六 結論

最後にロシヤ革命の將來は如何と云ふに、是れ容易に臆斷を下し得ざる所

なり。フランス革命に於ては、冷酷にして敏腕なる公安委員會の、何事をも顧慮せず何物をも憚らざる恐嚇政治に由りて、幾分秩序を恢復せんとしつゝありし際に、ナポレオンの如き天才出現し武斷政治に由りて一度國内の秩序を安定せしむるを得、而して其精鋭なる軍隊に依り大に國威を發揚するを得たり。ロシヤの將來亦若し斯の如くなるに於ては、恐らく同國の爲めに最も幸福なるべしと雖も、今日の狀勢より推さば之を期すること覺束なし。

次にナポレオンの如き天才出でざるまでも、國民が大に自覺して、其健全分子が中心となりて、撥亂の業を企つるとも、此世界大亂の最中に於て、戰鬪の手段に依らずして成功を望み難し、而も現代の戰爭は機械と學術との戰爭なり。假令露國人の敵愾心盛んなるも、大敗して武器彈藥以下殆んど殘る所なき今日、敵愾心のみにて能く幾何の事を成し得んや。

或はドイツがリガを始めクルランド、リヴォニヤ、エストニヤ等、バルト海

沿岸地を取り、ポーランド、ウクライナ、フインランド等はドイツの保護下に名義上の獨立を得、シベリヤ、中央アジヤ、コーカサス等、亦他の保護の下に自主國を創建し、ヨーロッパ、ロシヤの殘部は或は復辟して一の中等國を形成するが如き、極端なる場合をも、想像し得ざるにあらず。其他幾多の想定を試み得べしと雖も、要するに孰れが果して正鵠を得たりやは、今日の所未だ遽かに之を斷定することを得ずと謂ふの外無し。

實に現在のロシヤは世界の大なる謎にして、且歐亞兩大陸に直接の危險を感ぜしむる大なる噴火口なり。之が最終の形態如何は世界に大なる影響を及ぼすべきや論を須ゐず。

而して我國の如きも亦其餘波を蒙るを免れざる地位に在るを以つて、何時大激浪の襲來を見るなきを保し難し。故に一たび思を茲に致さば、我國は方に高臥安眠を恣まゝにすべきの秋にあらず、國内に於ける無意義の政爭に奔

走し、又は目前の小利益に齷齪すべきの時にあらず。吾人は實に此の大激浪の間に立ちて、水中珠を探る底の覺悟なかる可からざるなり。

（大正七年三月）

ドイツの世界政策と我日本

一　批判は公平を要す

今次の大動亂に就きて批判を求むるに、ドイツに留學した人とか、ドイツ語に由りて學術を修めた人とかになると、人情の自然として、其の學ぶところに僻し、どうしてもドイツ人が考へるやうに考へることになる。是れと同じやうに、英佛に留學した者、英語佛語に由りて學問した者は、又餘りに聯合國側に僻して考へることになる。若し公平なる批判を下さむとするには、雙方の論爭を比較し、世界の大勢を達觀し、卓越せる常識に訴へ、以て公平無私なる立場に居らねばならぬ。日本は、勿論聯合軍側に立つて居るから、彼等に

向つて滿腔の同情を表する義務はあるが、全く公平なる批判を下さむとすれば、ドイツ側に對して、徹頭徹尾非難のみを加へず、第三者の不偏不黨の見地より判斷せねばならぬ。卽ち自分は、斯る立場から、上揭の題目に就て語らうと思ふ。

二　戰爭の責任——白國中立の侵害

日本の多くの人々は、今回の戰爭の全責任をドイツに負はしめて居るやうであるが、然し戰爭の根本の原因に就いて研究すると、結局雙方の根本的國是が兩立し難い爲めに、自衞上戰爭によりて解決せねばならぬことになつたのである。故に此間に曲直正邪を爭ふは無理であると思ふ。

ベルギーの中立蹂躙は、ドイツの幾多の辯解に拘らず、極めて亂暴なる條

約違反である。然しドイツ人は一度自分の定めた計畫、理想等があれば、他の周圍の事情に頓着なく、論理的に其最後の結果まで押し通す性質がある。之れは獨人の長所でもあり短所でもある。ドイツは佛國を攻むるには、ベルギーよりするを以つて最容易なりと考へ、これを實行する爲め、自衞の力なき小國ベルギーを蹂躙するのは、止むを得ざることで、條約も國際法も自國の便宜の爲めにあるもの故、之に違反する位は當然であるといふ如き、根本の考から出發して居るのである。此考の正邪は別問題である。

尤も聯合軍側の方でも、サロニカ占領は小國の中立權蹂躙に相違ない。今度の戰役は既に國際法をして全く顏色なからしめた。殊にハーグの平和會議などは、全く反古同然となつたのは慨嘆に堪へぬことだ。只だこゝに一言し度は、ドイツは戰爭前より小國の權利を重んぜぬ言論が、幾多の著書、雜誌、新聞にも見へ、又戰爭初りて後も、廣き意味の自衞——攻擊の場合をも含む

自衛の爲めに、何事を行ふも可なりといふ主義が、餘りに露骨に、餘りに我儘に發揮されたことは、結句自己の爲めに不利益となつたのである。

三　ドイツ國民の理想

ドイツが、如何なる暴行をも論理的に行つたことは、やがて初めに彼に同情せる中立國に於いてすら、尠なからず排獨的精神を惹起せしむる結果を來たして居る。而してドイツが、如斯露骨に我儘に暴行を敢てし、是れにドイツ式の理由を與ふるに至つたのは、大いに原因がある。

由來ドイツ人は、ドイツを、世界の覇者となして、世界萬邦を制御し、獨逸の文化を以て此の理想統一することをその理想として居る。而してこの理想は、やがてドイツ人をして、自ら世界中の最も優秀なる國民、上帝より特に

選拔され特別に愛着されたる國民であることを盲信せしむるに至つてゐる。既に此の自尊心有り、於是かドイツ國民が、ドイツの爲めにすることは總て善で、如何なる暴行をも、一にドイツの利益にさへなれば、理に適つて居るものと信ずるに至つたのは、亦た自然の結果である。

四　列强の世界政策

世界統一と云つたやうな遠大なる理想を懷くのは、ドイツに限らず、又必ず惡いことでは無い。斯る高遠にして雄大なる國家的理想有りて、乃ち國民は國家富强の道に盡瘁することにもなる。世界の强國々民は概ね多少這般の世界統一策を理想として居るのである。

例之ば、英國のセシル・ローズ一派の英人は、——世界は將來アングロ

サクソン人種に、支配せらるゝ運命を有てり、と信じて居るのである。又、露國にも――露國は、地理的にも歴史的にも歐亞兩大陸を聯結せる故、東西の文明を融合統一して、世界を支配する使命を有すと信じた露人は澤山ある。

只ドイツは、世界政策を實行する上に、一に侵略的征服的主義を奉じ、他國民の休戚に至りては、毫も之れを念頭に置かぬのが非難の點てある。而してドイツが、斯くの如く傍若無人の振舞を敢てするに至つたには、亦た相當の原因が伏在して居る。

五　ドイツ人の成上り根性

ドイツ民族は、久しき間他國から蹂躙されて、彼等は齊しく切齒しつゝあつたのである。然るに、最近五十年間に於けるドイツはプロシヤを中心とし

て、極めて顯著なる發達を成し、成功に繼ぐに成功を以てし。千八百六十六年にはオーストリヤを破りて北ドイツ聯邦を組織し、千八百七十一年には佛國に勝ちて茲にドイツ帝國を建設し、爾來、政治、經濟、學術、軍備共に眞に驚くべく迅速なる進歩を爲し、世界各國の畏敬する所となつた。於是か彼等ドイツ國民は、此極めて急速なる成功に醉ひ、其世界政策に就きても、謂はゆる『成り上り根性』を發揮することに至つたのである。今回の戰爭も、決してカイゼル並に二三軍國主義者が企てたものでは無く、實にドイツ國民全體の志望に外ならぬのである。

現に、ドイツの思想界を支配せる學者でも、ドイツは最も優れたる國であり、世界の各邦はドイツに隷屬すべきものゝやうに考へて居る。そこで彼等は、ドイツが速かに世界統一の理想を實現すべく、他國の休戚の如き、全く之れを考へて居らぬ。實にドイツは『成り上り』者の共通性として、極めて

尊大で、極めて我儘である。他の國民と同化するを思はずして、之を擯斥、除外、滅絶せむことを念として居る。かのポーランド人に對しても、同化的政策が思ふやうに成功せざるや、彼等を放逐すべしと云つたやうな議論が盛んになつて來た。要するにドイツ人は、如何なる手段を講ずるも、世界をドイツに隷屬せしめむとするもので、斯くてドイツが世界の危險國視せらるゝのは當然のことである。

六　東洋の新興國

維新當時の日本の國狀は、極言すれば獨立さへ危いほどであつた。夫れが外國の侮りも受けずに、維新の宏業を成し遂げたのは、要するに我が國民が、國家の危急を自覺し、此の自覺によりて擧國一致の實を示し、爾來、泰西の

文物を輸入するに努力し、日進月歩、前には眠れる獅子を以て目されたる支那を屈服させ、後には世界を驚怖させ居たる露國に打擊を與へ、斯くて、世界列强の仲間入りをするとゝもに、一種の嫌惡を以てすら見らるゝことになつた。勿論、ドイツの如くに爾く惡み且つ恐れらるゝ程度には達せぬが、世界が東洋の新興國を視るや、まさに幾何か、歐洲の新興國ドイツに對するが如きものがあるとも云へる。又日本國民の中で、一部の者が懷て居る世界政策も、亦たドイツ其他强國々民の中で抱て居る世界政策と多少似て居る所もある。

日本が、世界政策として東西文明の統一を計り、旭日旗の下に世界の平和を保障せんとするは可い。之は立派な理想である、然し、其實現の上に『成り上り根性』を出しては成らぬ。ドイツの如く自國の急速なる發展に心醉して、彼の如き露骨な我儘な征服的方針を取るのは大に惡い。實に日本は、東西を

融合せしむるに極めて好都合な、地理的形勢と歴史的經歴を利用し、經濟文明及び精神に於て宇内を支配することを理想とせねばならぬ。

七　日本の世界政策

精神に於て宇内を支配すること、是れが日本の世界政策であらねばならぬ。而るに國民動もすれば、朝鮮新附の民に對しても、之れを同胞視せざらんとし、從て十分其利益を計てやらぬやうな傾きがある。殊に、かの一部の滿蒙論者の叫ぶが如く、他國の領地を、自分の勝手に處分せんとするのは、其の露骨さ、其の勝手さ、ドイツの軍國主義者の主張と、大差が無いのである。若し『成り上り根性』を以て、ドイツ一流の世界政策を實行せむとするに於ては、必らずや日本も、四面皆な敵と云つた、難境に立つに至るに定つてゐ

る。

英國のエジプトに對する政策は、或點に於て、稍〻理想に近いものと云へる。英國は、久しくエジプトのトルコの屬邦たることを認め、表面只だ財政上の支配權を行つたに過ぎぬ。最近英土開戰の結果、公然エジプトを保護國と宣明したが、未だ直屬とはせぬのである。英國のエジプト保護は必ずしも王道的ではないが、果物の熟して自ら手に入るを待つが如き觀がないでもない。斯くの如く急がず逼らず、而も英以上に人道を重んじて進むが、日本の執る可き方針である。

八　王道を以て政策とせよ

ルイ十四世がオランダを侵略せむとしたる時、ドイツの碩學ライプニッツ

は、王に建言して、オランダを攻むることは、歐洲全土を敵とする結果を生ずる、夫れよりはエジプトを征服し、茲に根據を据ゑて、インド方面に經濟上の發展を試むれば、征せずして自らオランダを凌駕することが出來る、と云つたのであるが。さすがの王も、之れを以て學者迂遠の理想として、一顧をも與へなかつた。然るに英國は實に二世紀を費して、よくライプニッツの遠大なる理想を實現したのである。

征服的方針は斷じて不可ぬ。されど國家の大なる發展を見むがためには、まさにライプニッツの有せるが如き遠大なる理想の下に、世界政策を實行する大信念と大努力を要する。又他國の富源の開發されぬは、進んで之を開發し、彼我共に益を得ねばならぬ。他國民を同化して我と同じ理想に浴せしめねばならぬ。而して、之れが實行に際しては、十年二十年の近い利益に支配せられず、よく世界全人類の幸福と利益とを念とし、千歳の遠きに目標を据

ゑて、事を企て、事を行ふやうでなくてはならぬ。實に日本が、日本魂の偉大なる靈力を以て世界統一を策するのは、卽ち孟子の所謂『王道』を世界に施くことになる、自分は、此の意義に於て、日本がドイツの惡しき點に顧み、善き點を學び得ると思ふ。

（大正五年九月）

史眼に映ずる太平洋と其將來

一　太平洋問題の意義

ナポレオン一世は『地理は歴史の主要なる動力である』と云つて居るが、誠に至言である、我國は太平洋の中心にある海島國である以上は、太平洋問題に就いては最大なる關係を有し、其解決は我盛衰興亡を意味するのである。言ひ換へれば、我日本は其地理上の位置からして、太平洋の主人公たるの運命を持つて居る。

日本以外、此所に關係を有する者の中、露、米、英は最も其關係深く、獨、佛、蘭の如きは其次位にある。而も露、米、英すら太平洋を以つて其最重點

とはしない、其中心は他の方面にあるのである。即ち彼等は日本に比すれば寧ろ客位にあるが、而も小利と雖も容易に捨てないのは彼等の常である。況んや其國の世界的發展に大利害を有する太平洋に關して、彼等が甚深の注意を拂ふは素より其所である。『ローマは一日にして成らず』日本以外太平洋に最大の利害を有する露、米、英が之に至りたるには數百年の歴史を有つて居るので、太平洋問題は決して一朝一夕に起つたのではない。彼等國民が太平洋に關して未だ何等の自覺なき時より、不思議なる運命の魔手は彼等を誘ひ、被等に種々の必要を感ぜしめて、或は東漸し、或は西移し、或は北進して知らず識らず太平洋の競爭場裡に入り、種々の波瀾曲折を經て、最後の解決に近づきつゝある。

此最後の解決は早晩來るべくして、到底避くる能はざるものである。即ち茲に激甚なる生存競爭が現ぜらる可きものであるが、此問題に最後の勝者たら

ざるも、他の三國は其國家の存亡に關するとはないが、我日本にして一朝敗者とならんか之卽ち我國はも早や强國として存在し能はざるの悲運に陷り、事毎に他國の下風に立ちて、其壓迫に甘んせねばならぬ時である。否或はもはや國家としては生存し能はざるに至るやも知れないのである。吾國民たる者は須く此問題を輕々視せざるべきである。玆に予は太平洋問題の小史を叙して、聊か邦人將來の覺悟を促さんとするのである。

二　太平洋探檢の初期

世界政策は一四九二年のアメリカ發見に始まると云つてよい。コロンブスは四度航海したが、其發見したる陸地は支那、インド附近と誤解し、新大陸の一部であることを知らなかつた。其の後一五一三年に至り、イスパニヤ人バ

ルボアは、今のコロンビヤ北岸から山を越えて、初めて太平洋を發見した。次いでポルトガル人マジェランはイスパニヤ王の命を奉じ、マジェラン海峽を通過して、一五二一年に始めて太平洋に出て、フィリッピン群島に達し、彼は其處に死したれども、其の徒は印度洋を航し、アフリカの南端を迂廻して翌一五二二年にイスパニヤに歸つた。之れ卽ち世界一週の始である。

一五七八年に、英人ドレークは第二の世界一週を試みた。其の通過したる道程は略々マジェランと同一經路であつた。而して當時太平洋に關する西洋人の知識は尙未だ幼稚なるを免れなかつた。

然るに一六二〇年には英人エドマンド・ガンターは測量に對數表を應用することを發見し、一七〇〇年にハーリーは、世界に於ける磁針方向の差異を明かにしたる海圖を作製し、又一七三六年にジョン・ハリソンがクロノメートルを發明し、經度測定に一大便宜を與へた。此等の發見ありたるが爲に、

十七世紀の半より航海術著しく進歩し、太平洋方面にも次第に探檢行はれ、十七世紀の初には、イスパニヤの航海者、メンターネ、デ・クイロス等の探檢もあつたが、其後オランダ人タスマンは一六四二年に、バタヴィヤより解纜して、タスマニヤ、ニュー・ジーランド、オースタラリヤ、ソシエテ群島等を發見し、之に依つて南太平洋は稍明かになつた。が、而も尙ほ北太平洋に關する知識は頗る不完全であつた。去れば、當時のマテオ・リッチ(利瑪竇)の世界地圖を見ても、北米海岸日本支那の北部等に關しては、明瞭を缺きたる所が多かつた。太平洋の地理的知識の光明を與へたのは、一七六八年より同七九年の間に於ける、英人ゼームス・クックの三回の大遠征であつて、之れに依り南太平洋の地形が精確に測定され、サンドウィッチ(ハワイ)諸島も發見されたのみならず、北米の西海岸より、北緯四十五度に達した。又露人スパンゲンブルグは一七三六年に南千島、蝦夷及我が本土の海岸を探檢し、一七七七

年には露人ボンプーセは日本の北海を探檢し、一七八二年に、佛人ラ・ペルーズは米國西海岸、支那、日本、カムチャツカを探檢し、宗谷海峽(卽ち彼の名に依りてラ・ペルーズ海峽と稱す)を通過して、日本海に這入つたが、尙未だ樺太の島たることを知らなかつた。

三　露人の太平洋到達

露國がシベリヤに入つたのは、單に土地侵略の慾望よりしたのでなく、毛皮を獲ることが其の主なる動機であつた。毛皮は夙に歐洲の文明國で尊重されて、之にて作る外套などは、王侯貴族の表章とせられたが、歐洲にては此毛皮を有する獸類が次第に減じて、之をアジヤの北邊に求める樣になつた。ウラル山脈に接してシベリヤ西北隅にあるシビルの蒙古人は、既に第十二世

紀以來、露國北方にあつたノヴゴロド共和國民と毛皮の事に就て、數〻爭鬪をして居たのである。一五五五年に、シビルの酋長イェジゲルが使を露都モスコーに送りてイヴァン四世の保護を受け、之に臣屬たらんことを乞ひ、イヴァン四世は之を容れて、自らシビルのツァールと稱した。一五六〇年頃には露國の使者が支那方面まで來たものである。然るにかのイェヂゲルはキルギスの蒙古人クチュムなる者に殺されたので、當時シビルの隣地に拓殖事業を營み、毛皮貿易に從事して居つたストロガノフは、クチュムが其事業を害するに及び、一五七九年にコサックの頭目イェルマクをしてクチュムを討たしめ、一五八一年シビルを平定して露國に獻納した。

其後慓悍なコサックは次第にシベリヤ各地を征服し、征服するに從つて政府は要塞を造り、市府を開いて將軍を置いた。斯くして一五九〇年にはトボルスクをシベリヤの都府とし、一六〇〇年にはツーリンスクを、一六〇九年

にはトムスクを、一六一七年にはクスネスクを、翌年イェニセイスクを、一六二六年にはクラスノヤルスクを、一六三二年にはヤクーツクを創設し、コサックの探檢は次第に東進してオホーツク海岸に至り、一六三三年には遂にカムチャツカに達した。

彼等の目的は專ら、毛皮を獲るにあつて、土人をして黑貂、黑狐、赤狐等の皮革を人數に割當てゝ貢せしめ、又資本家は探檢家と結んで、毛皮の獲得に鋭意すると共に、土民一人幾枚と云ふやうに、誅求至らざる無き有樣であつた。斯くてコサックがバイカル湖畔に達したのは一六四六年で、同五二年にはイルクツクを、同五六年にはネルチンスクを創建し、一六九九年にはカムチャツカ全部を平定した。其後コサックは益々探檢拓殖に鋭意し、第十八世紀に至つてはアレウト列島、アラスカを探檢し、從來の毛皮に代るに臘虎、膃肭臍等の海獸の毛皮を以てするに至つた。アラスカにはコサックのデ

シネスが一六四八年に至り、其後ベリングは一七二五年にカムチャツカ附近を探檢し、ベリング海峽を發見した。ベリングはアラスカに達し、更に一七四一年には、オホーツク海を經て米州の北西海岸を探檢した。ゼームス・クックは一七七八年にアラスカ海岸を測量して該地方、の最初の稍良好なる地圖を作り、一七九三年より翌四年にかけてヴァンクーバーはアラスカの南東海岸を探檢し、現代的意味に於ける最初の完全な海圖を作成した。

其後探檢隊、植民等が續々入込んだが、此等の探檢隊は至る所に土人を虐待し、掠奪、强姦、虐殺爲さゞるなき迄に道德が低かつた。彼等曰く『神は高きに在し、ツアールは遠きに居る』と。蓋し如何に惡事を働くも可なりと云ふ意であらうか。從つて土人の怨恨を買ひ、遠征隊、植民隊は數〻不意を襲はれて全滅することがあつたのである。

四　日露兩國民の接觸

一五九六年にコサックの長アトラソッフは、アナヅイルより南下して、カムチャッカに入り、慓悍なる土人を征服して、毛皮の貢を爲さしめやうとした。其際同所のチッチャ河邊に於て、土人より前年漂着したる露人ありと聞き、之を尋ねたるに、それは露人にあらずして、デブネと云ふ日本人であつた。之が日露兩國民接觸の始である。アトラソッフは一七〇〇年に、デブネを伴ひて、アナヅイルに歸へつたが、ペートル大帝之を聞き、其日本人を見んことを求めたので、デブネは遙にモスコーに送られ、一七〇二年二月八日、帝に謁して帝と長時間に渉る會話を爲した。其の後大帝は命を下して、デブネに露語を敎へしめ、而して露人に日本語を傳習せしめた。又デブネは一七一

○年に洗禮を受け、ガブリエルと改名して露國に仕へた。一六〇二年、即ちペートル大帝がスウェーデン王チャールス十二世の爲めに、ナルヴァに大敗してより、僅に二年の後で、國内にも彼れの急激な改革に不滿を懷いて、密に陰謀を運らすので、内外多事の時であるが、而もデブネと會見して、東方の異聞に耳を傾けたのは、單に帝の好奇心のみではなく、其處に多少遠大の志が藏せられて居たとも見られるのである。

一七一三年にコサックのコシュフスキーは千島のクナシルに來り、一七三五年にスパンゲンブルクが南千島、蝦夷、日本々土の海岸を探見した。一七八二年には伊勢の幸太夫といふものが露國に漂流し、イルツクに在ること十年の後、露人ラクスマンが幸太夫を率ゐて、オホーツクより蝦夷の地に上陸し、一七九二年(寛政四年)函館に來り、漂民を返して、我れに通商を求めて來た。尤も之はガザリン二世女帝の命なれども、女帝は事の成否を疑ひしものか、わざ

と自己の名目を出さしめず、ラクスマン一箇の名を以て談判せしめたが、果して幕府は之を拒絶した。しかもカザリン二世はイルクーツクの航海學校に日本語科を設け、漂流民をして其の教師たらしめた。

之より嚮き、日本は益鎖國主義を嚴にし、一七九〇年(寛政二年)には和蘭船を一隻に限り、又江戸に送る奉幣使は五年に一度と定めた。而して其の翌年英船アルゴノート號は米の西北海岸で毛皮の貿易を爲し、次で我東海岸に通商を求めて來たが、幕吏は薪水を與へて返してやつた。此年、敵意ある外國船を擊攘すべき命令を下した。

其の後ブロートンの率ゐた英國の探檢船は、一七九七年に蝦夷の南東海岸を始め、南千島、樺太の南部等數箇所に來た。爾來日露の關係は愈密接となり、之が活動は怪傑レザノフに依つて表されて居る。

五　怪傑レザノフ

アレウト列島やアラスカには毛皮獣捕獲及び其貿易を目的とする多數の露人の會社が出來たが、此等の會社が次第に合併せられて、最後にシェリコフ・ゴリコフ會社と、レベデ・ラスチェル會社の二會社となつた。シェリコフ・ゴリコフ會社の首脳となつた。グレゴル・シェリコフは却々の野心家で、其の部下に、アレクサンドル・バラノフといふ敏腕家を出張所の總支配人として居たが、獨占權を得ん爲めペトログラードに行き大に朝廷に運動せんとし、會〻一貴族レザノフ伯を其女婿とし、會社の發展策を相談した。此のニコラス・レザノフ（日本にては誤つて之をレザノットと云ふ）といふは甚だ貧乏な貴族ではあつたが家柄は高く、頗る野心家にて、精力絶倫であつたから、シ

エリコフと意氣投合し、彼はシェリコフの計畫に一歩を進め、英國の東インド會社の如く、東方の毛皮獲得及び其貿易の事を獨占する一大會社を起すの策を立て、カザリン二世女帝に說きて、殆んど其特許を得んとした時、不幸にも一七九五年シェリコフは死し、其翌年女帝も亦死んだ。

されどレザノフは少しも落膽せず、カザリン女帝とは性質政策全く異れる其繼承者ポール一世にも巧に取入り、終に其許可を得た。時にイルクーツクの本社に留りて夫の代理を勤めて居たシェリコフの妻ナタリヤは、其後バラノフを支配人として萬事を托し、レザノフを顧問として、一七一八年（佛國革命の初年）にアラスカ、アレウト列島等の貿易を獨占する共同大商會を作り、資本金七十二萬四千留（一株千留、即ち總株數七百二十四株）の株式會社となし、凡ての毛皮獵者をも株主たらしめた。

斯くて一七九九年八月十一日の勅令（ウカス）に依りて、茲に初めてロシヤ・アメリ

カ商會が全く成立し、カムチャツカ、アレウト列島、アラスカに於ける貿易の獨占權を獲得した。此際一千株を增したが、外國人には株主たることを許さなかつた。而して一八〇〇年十月九日には、本社をイルクーツクよりペトログラードに移し、後二年にして皇帝、皇后、コンスタンチン大公が各二十株宛を持たれたので、露米商會は愈〻皇室と密接な關係を有するに至たのである。レザノフの妻は父シェリコフに續いて病死したので、レザノフはその遺產を凡て露米商會の株とした。

此時英米人が同じく毛皮獸捕獲竝鯨魚捕獲の爲め盛んに來り、而して毛皮を海路支那に送りて莫大なる利を得て居た。レザノフも之を見て、從來の如く毛皮貿易を陸路よりするよりも、海路に依るの遙かに經濟なるを悟り、且つ英米人と競爭するの避け難きを知り、之には先づ日本を開國さするの策を思ひ立つた。卽ち彼は日本とも貿易を希望するのではあるが、其主なる目的は日

本を以つて支那貿易の中繼所として、薪水を得る事、及び食料其他の需要品を得て、其植民地經營に便せんとする事にあつたのである。レザノフ卽ち朝廷に運動して、皇帝をして日本へ大使を送り開港を求めしめ、而して自己を其大使に命ぜしめたのである。かのクルーゼンステルンの率ゐた艦隊は一八〇三年八月七日クロンスタットを發し、インド洋より太平洋に出で、サンドウイッチ島（ハワイ）を經て、一八〇四年七月十四日（我文化元年）にカムチャツカのペトロパウロスクに至り、此所でレザノフが司令權を握り、九月六日に、同所を發して、十月八日我長崎に着し、互市を求めたのである。然るに幕府では之を拒絕したので、彼の使命は果さなかつた。

レザノフはアラスカのウンアラスカ島に來て、此所より露帝に上書した。レザノフの文面の梗概は左の如くである。

『毛皮賣買は最も利益のある事業にして、之を發展せしめんには、他の競

爭者を倒さざるを得ず、其手段としては、武裝せる軍艦を以て米人を驅逐せざる可らず、次にアラスカの植民を發展させる爲には、食物の供給を充分にする要あり、之にはイスパニヤと談判して、フィリッピンよりパンの原料砂糖酒等を得て、カムチヤツカに用意し、米洲にある我植民地を發展さすると共に、軍艦を造りて、次第に日本の港を開かしめん。『陛下は下の事に就き、臣の爲すことを罪とし給はざるべし、卽ちリューテナント・フヴォストフ及びタヴィドフの助により、臣は船を修繕し、武裝したる後、明年を期して日本の海岸を襲ひ、サガレン島より日本人を驅逐し、松前の植民地を破壞し、又千島より日本人を驅逐し、彼等の漁業を攪亂せば、二千萬の國民は食を失ふべく、日本は蒼皇として港を開くに至るならん。臣の聞く所に依れば、日本人は大膽にも敢て我千島のウルップに出張所を設けたりといへり』云々。

怪傑レザノフは實際斯る豪膽な事を計畫したけれども、さすがに未だ政府の許可がなきを以て、獨斷で餘りに大膽なる事も爲さず、彼がフヴォストフ及びダヴィドフに與ふ可き訓令を數回改竄した。而かも此訓令が實際に現れて來た時に、フヴォストフ等は一八〇六年には樺太に寇し、エトロフを冐し、我船舶を拿捕し、民家を燒き、守備兵を追ひ、又威嚇の書を松前に送つて互市を迫つたのである。

之に至り幕府も大に警備を嚴にして待つて居た時に、一八一一年ゴロフニンが軍艦を率ゐて我北海を測量して居たのを、日本人は欺き誘ふて上陸せしめ、幕内に力士を伏せて、ゴロフニン及び其隨從者を虜にして、松前に拘禁した。當時露國の海軍の人は露米商會と好からず、ゴロフニンの如きも、常に會社の行動に反對の意見を持つて居たが、茲に計らず會社がフヴォストフをして行はしめた亂暴の犧牲となつた。それでゴロフニンの下の副艦長リコルドは

報復として、高田屋嘉兵衛を海上に拉し去つたが、一八一三年に至りフヴォストフの行動は政府の與り知らざる所だといふ、シベリヤ總督辨解書が來て、ゴロフニンと高田屋嘉兵衛の交換が行はれ一先づ事件は落著した。

從來多く行れて居た說に從ると、フヴォストフがレザノフの行爲を手緩しと爲して、獨斷にて我北邊を荒したと云つて居るが、其實フヴォストフはレザノフの訓令を得て甚だ之を面白からず思つたけれども、上官に對する服從心より止むを得ず實行した。しかも露の官憲は大にフヴォストフ等の行動を非難し、彼を拘禁したのである。

レザノフは中々に其大志を更めず、一方にアラスカに於て軍艦新造を企て、其成るに及び、復た日本に逼り、開港を餘儀なくせしむめんと期せるのみならず、數〻カリフォルニヤ(當時イスパニヤ領)に往來して、此邊をも漸を以つて手に入れる考であつて、露米商會をして之を建白せしめたが、露國朝廷

は之を許さなかつた。彼は又バラノフに命じて、ノヴォ・アルハンゲリスク附近の一島に宿舍を建てしめた。之は日本の熟練なる職工を奪ひ來つて、此島に移住せしめ、アラスカ植民地經營に用ゐんが爲めであつて、其ヤボノ島をーヴスキと名けた。此等計畫が實行されぬ以前に、レザノフは一八二三年十二月二十日に死んだ、而して本國政府はカリフォルニヤに全く斷念して、其地方の居留地を撤したのである。

六　米國人の太平洋到著と其發展

アメリカ合衆國は其獨立戰役の末、一七八三年のヴェルサイユ和約に依り、カナダと佛領たるルイジャナの間にある、西方一帶の地に對する權利を得た。尤も此西方の州は未だ探檢されざる所であるから、從て其區域の如きは甚だ

不明であつた。去り乍ら、北米内地諸河川には獺の類が多く棲息して其皮革が高價であるから、此皮革を得んとして不毛な内地へ深く立入る者が相次いだ。彼等は多くは不羈無頼の徒にして利の爲にする者なれども、元來猪勇的奮闘的冒險者であつて、餓寒と戰ひ、土人と闘ひ、或は巨富を得る者もあり、又途中に倒るゝ者亦少からずと雖も、彼等は敵の塹濠に突入する決死隊と同じく、米國發展の急先鋒となつて道を拓いたのである。

斯くて米人は次第に歩を進めて、終に太平洋海岸地までも出たのであつたが、之と前後して太平洋面には海上より廻り來る者もあつた、而して太平洋の北方には、鯨や毛皮獸が夥しくあつて、之れが捕獲や貿易が、海岸地を繁昌ならしむるに至つた。

米大陸の太平洋岸の地方には、イスパニヤが最古き言ひ前を持つて居た、之はコルテスがメキシコ征服の後、探檢隊を派して、下カリフォルニヤを占領

したのに基いて居る。フランスも亦ラサルの探檢を根據として、多少の言ひ前を持つて居た。然るに一八〇三年ナポレオンよりルイジヤナを購買したと共に、サバイン河以西の地に對する、佛の漠然たる言ひ前をも受繼いだのであるが、之は一八一九年の米西條約により、合衆國は一切此言ひ前を棄てたのである。卽ちサバイン河を溯り、北緯三十二度に至り、それより直北レッド河に至り、レッド河を溯り經度百度に至り、アルカンサス河に達し、之より直に北緯四十二度の線に達し、之より西太平洋に至る所（卽ち今のワイオミング、アイダホ、オレゴン等の地）之を兩國の境としたのである。

米人が斯くの如く、浸々として太平洋岸に發展しつゝある間に、一方に英國人もカナダ地方より同じく獺を求めて、次第に向西運動を續けてゐた。故に所々にて米人と競爭衝突を生じ、少くとも双方の言ひ前が正反對となつてゐた。更に北方には、露國人の南下運動があつた。彼のレザノフのカリフォルニヤに

對する野心の如き夫れである。去れば此太平洋問題は早くより米國政治家の胸中に往來したのである。

元來米國人民の發展の勢は、實に猛烈であつたから、必ずしも他國の權利などは顧慮して居ないで、無二無三に進むのであつた。尤も他國民の權利といふものも、漠然たることが多いので、米國人の實際的發展は、之に對して頗る強い壓迫となつたのである。殊に對手の國が弱い時は、米人の根强く突込んで來る運動には、到底對抗し難いのである。イスパニヤ領であつたフロリダ州の如きは、米國の植民がずん〳〵侵入して其勢力を作るので、境界論が絶間なく、殊にルイジャナをフランスより購買してより、其侵入の勢が一層烈しく、終に之を實際に占領した、之が一八一二年英米間の戰爭を起す一因となるに至つたが、一八一九年イスパニヤは五百萬弗の代償を得て、賣却の形式にてこれを讓與した、ナポレオン一世すらルイジャナの事より米國の

壓迫に苦み、英國との戰中にあつて之を維持し難いので、意を決して之を合衆國に賣却したのである。

彼のモンロー主義は、大統領ジェームス・モンローが一八二三年十二月二日附にて國會に送つた敎書に有る所で、歐洲諸國が今後米洲の事に干涉し、若くは新に領土を拓き植民を爲すを許さず、といふ主義であつて、其近因は歐洲に於ける神聖同盟がイスパニヤを助けて、獨立した其植民地を壓服せしめんとする企圖を妨ぐるにあつた。之れは表面に於ては、米洲に他强國の力を植ゑしめぬといふ純防衞策であるが、又一面には自己の發展の衝路に當る凡ての阻害物を打破しやうといふ、攻勢防禦策をも含まれて居るのである。

此後者に當る最適切なものは太平洋問題である。前述の一八一九年の米西フロリダ條約中に於て、西國はフロリダを讓ると同時に、北緯四十二度以北の太平洋沿岸地に對して總ての權利を放擲することを言明した。茲に於て大

統領モンローは、彼のモンロー主義發表の前年、即ち一八二二年、國會に敎書を送り、西國が斯く其言前に關し其限度を明にした以上は、更に他の各國の言前を嚴密に調査し、我國の主張と妥協を求むべしと告げ、之より談判を開始した。露國は前年(一八二二年)には其南境を北緯五十一度とし此以北に他國の漁船の入ることを禁じたに拘らず、今や談判の末大に讓歩し、一八二四年四月露米議定書に於いて露國は北緯五十四度四十分以南を占領せざることを承諾し、之に對し米國亦同緯度以北に其植民地を設けざることを約した、而して露國は更に其翌年一八二五年英國と同意義の議定書を作つたのである。

英米の境界に關しては双方相當の言前があるので談判長引き、一八四六年大體現今の境界線に定つたが、唯太平洋岸に於ける境界線の水上終末に關して、双方頗る强硬の意見を抱き、久しき間決しなかつたが、最後に兩國合意の上、之れをドイツ皇帝ウィリヤム一世の審判に一任することゝなり、一八

七二年、アメリカの主張が貫徹さるゝことゝ成りて、漸く談判の局を結んだ。

又北緯四十二度以南の太平洋沿岸に關して、米國の攻勢的發展運動が著々其功を奏した。即ちテクサス州には、米國南部諸州の人民が續々移住して開拓をした爲めに此地方の大部分に於いて米人の勢力が盛んに成つた。此等の移住民は其組織的才能を發揮し、自治制を布きたる結果、自然テクサスはメキシコ内の半獨立の一州の如く成つた。之より先一八二一年メキシコは西國より獨立し、米國は一八二七年及び一七二八年にメキシコに向つて、テクサス州購買の談判を開いたが、メキシコは之に應ぜず、唯一八二八年、先に一八一九年の米西條約に於て定められたる兩國の境界を再び確むることゝ成つた。

一八三五年メキシコ大統領サンタ・アンナは、テクサスに對する中央政府の權力を大にせんとしたるに、米國移民は之に抵抗して反旗を翻し、一八三六年移民の將ハウストンは、大にサンタ・アンナの率ゐた優勢の軍を破り

て、大統領を虜にし、之に逼つてテクサスの獨立を承認せしめた。茲に於てテクサス人民は、テクサスを合衆國の一州と爲すことを申入れたるに、米國には併合論者と否併合論者とありて、一八三七年には、米國政府はテクサス獨立を認めたれども、其併合を拒絶した。然るに其後併合論者が勢力を得て、遂に一八四五年に至り併合を決行することになつた。然るに、一方メキシコに於けるサンタ・アンナの繼承者は、彼れの認めたテクサスの獨立を認めず、此事より終に合衆國は同年メキシコと開戰し、テクサスを占領し、別軍はニュー・メキシコをも占領した。

就中カリフォルニヤの占領は米人の遣口の一例を示して居る。即ちメキシコはカリフォルニヤに對して少しも力を致さなかつた。それで同地の西國植民等は一八四六年モントリーに開きたる代議士會議に於て、メキシコより分離することを決議したが、合衆國に加入するや、若くはヨーロッパの一國に

屬するかは決議しなかつた。然るにフロモンの率ゐた探檢遠征と稱する米の軍隊が侵入し、同時に米の艦隊が海上に現れ、而して土着の米國移民が奮起して內應したので、カリフォルニヤは忽ち米人の手に落ちたのである。而して、一八四八年二月二日のグアドルペ・イダルコの和約に依り、米國は千五百弗の代償を拂ひ、メキシコをして、テクサスの外、カリフォルニヤ、ネヴアダ、ユター、アリゾナ、ニユー・メキシコ、コロラド、ワイオミング等の地を讓らしめた。之に依りて米國の太平洋沿岸地は非常に擴張されたのである。

七　太平洋東岸に於ける露國の南下

露人が早く太平洋北岸に達したのに、一方その南海岸に十分に降らなかつた。理由は如何といふに、之は此所に支那といふ大國があつた爲めである、

一六三六年コサックの一隊がトムスクを發して東行し、三年を經てオホーツク海岸ウルヤ河口に達し、黑龍江地方の豐饒繁昌なるを聞き來つて之を報告した。茲に於てホヤルコフの率ゐる一隊は、一六四三年ヤクーツクを發し黑龍江地方を探檢して、一六四六年に歸著した。一六四九年ハバロフといふ者再び遠征し、且つ戰ひ且つ進みて、黑龍江兩岸の大半を平定し、アルバジン城を築いた。

之より露人は清の滿洲軍と數ゝ境上に戰ひ、互に勝敗ありて、アルバジンも亦數回清人の爲に陷れられたのである。それで一六八六年、當時其弟イヴァン及びペートル(卽ち大帝)に代りて攝政であつた、ソフィヤ內親王は此紛爭を解決すべくゴローヴィンを派遣した、ゴローヴィンは清國の全權大使索額圖と會見談判の末、終に大に讓步して、一六八九年八月二十七日ネルチンスク(尼布楚)條約を結んだ。此條約に依りロシヤは外興安嶺以南シルカ河以東の

地を悉く清國に返し、キヤフタに兩國の貿易所市場を開き、露の代表者の北京に駐在することを許した。

此條約の成りし年はペートル大帝が、其姉ソフィヤの陰謀を破りて、親ら眞の君主と成つた年である。去れば此條約は寧ろ彼の姉の事業であつた。而してペートル親政の始には、海軍等の事に熱中したけれども、一般の政治外交には餘り興味を有しないで、ガリツィン等に一任して居た時であるから、別にネルチンスク條約を破棄せんともせず、其後三年使節を支那に派遣した。

清國はネルチンスク條約後アルバシンを破壞し、アイグン、チチハル、キリン等に守備隊を置き、土人の露に通ずるを妨げ、貿易に嚴重なる制限を加へたので、之に於てペートル帝はイスマイロフ大佐を派遣し、支那と交通を改良せんと圖り、一七二一年オスマイロフは清帝に謁見し、破格の禮を以つて待遇されたが、使命の目的を果すことは出來なかつた。去ればネルチン